

Magazine + CD-ROM + Web

CD-ROM



2003年8月1日発行 隔月1回(偶数月)1日発行 局外23年7月9日 第3種郵便物認可

建築文化

kenchiku bunka

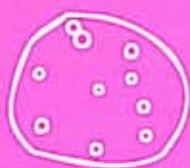
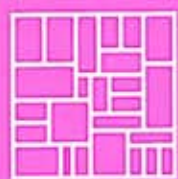
1968年生まれ~の建築家たちは建築の未来を拓くことができるか

no. 666

vol. 58

August 2003

8



アンダー

U-35のポテンシャル



第2特集

ラカトン&ヴァッサル



第2特集

Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal

ラカトン&ヴァッサル

そのあまりにも軽やかな風情でフランスの現代建築の中でも特異な輝きを発しているアンヌ・ラカトンとジャン・フィリップ・ヴァッサルの建築は、その肩ひじはらぬ自然体ともいえるアプローチによって、既成の建築の枠組みに揺さぶりをかけているように思える。この特集では、今から10年前の1993年以降の11作品に、バトリス・グレ氏によるインタビューを加えて、彼らの作品世界の魅力を探ってみたい。

ラカトン&ヴァッサル インタビュー

インタビュー+構成=パトリス・グレ

経済性、質、永続性について

ラカトン：経済性がわたしたちのプロジェクトの根底にあるというような考えは、ひねりつぶしてしまわないといけませんね。わたしたちは十分な予算のないプロジェクトを探し求めたりはしませんが、だからといってそうしたプロジェクトをわたしたちがまったく相手にしないと考えるのも誤りです。これはまた別の話なんです！

わたしたちの仕事について書かれた記事などを読むと、経済性がプロジェクトの出発点であり、プロジェクトはその直接的な帰結でしかありえないかのような印象を受けます。これはもちろんまったく逆なのです。最初の段階においては通常、非常に漠然としたいくつもの意図と選択があり、どのような予算が与えられるにせよ、経済性はそれらの実現化を可能にするだけのものにすぎません。経済性は、敷地と同様、もろもろの制約のひとつですが、しかしわたしたちの考えでは、補助的な手段でもあるのです。

そこで混同してはならないのは、経済性は低減化の原理、還元の原理なのではなく、

序列の原理、必要最小限の原理であることです。この意味で経済性にかかわる作業は、予算の重要性がどれほどであれ、興味深いのです。

ヴァッサル：実際のところ経済性において興味深いのは(10年前、あるいは15年、20年前にはそうでもありませんでしたが)、それが並外れたものを出現させる手段を創出するということです。いろいろの中でとりわけ経済性ははるかに巨大な空間を可能にするのです。しばしば建築家はいささか魔術師めいていると言われます。経済性はよく考えること、作業することのようなもので、きわめてシンプルかつ自然に、明白に事を行うという魔術師然としたところを建築家に可能にするのです。つまり、一種の明白さのもとでシンプルに自然に、ということですが。

ラカトン：経済性とはなにより、自分の欲しいものを手に入れるようにすることなのです。つまり、実現までの予算を管理運用し、不備を防ぎ手抜きなく、その予算でやりたいことを行う、ということなのです。

ナントのオフィスビルを例にとりましょ

うたのは、建築面積の1㎡あたりの金額ではありません。決定に絡むのはもろもろの判断基準であり、そのうちのいくつかはもちろん都市計画と法律の規制によるものです。それらと並んで、わたしたちの建築理念として、オフィスビルの空間のあるべき姿に関するわたしたちの意図があったわけですね——各階は光に溢れ、開口は上から下までガラス張り、開閉可能。またそこから出て戸外の空気を吸ったりタバコを一口吸ったりできます。快適な内部のために冷暖房と日除けの制御方式。こうしたことがわたしたちの出発点で、そしてその後で、クライアントからの限られた予算の中でいかにしてそこに到達し、これらの個々の目標に応えるかを探し求めたのです。わたしたちは安上がりで建てようという考えから出発するわけではありません。わたしたちが自分たちのためにしたいことすべてを行えるようにするにはどうすべきか、その問いを自らに投げかけるのです。

低コストであるのは事実ですが、本質的なクオリティ——空間、感覚、用途、快適さ——についてわたしたちが抱いている野心は、そのことで決定されるわけではあり

ませんし、また決して限定もされないのです。それでもやはり、経済性にかかわる作業はそこへ到達するのに役立つということなのです。

ヴァッサル：このようなアプローチは駆動力となります。20〜30年前には、建築において追求されるべきものでありえたのは、可能なもっとも大きな建物や、最小限の支持体しかないもっとも広大な被覆を考案することだと、たとえばそのように考えられていました。だからこそCNITやフライ・オートーの外被などが生まれたわけです。このようなアプローチの駆動力は、その当時はテクニックでしたが、今となってはアクチュアリティを有しません。今日の駆動力はプロジェクトの経済性でありうるのかもしれないのです。すべてのケースにおいてこの駆動力を並外れた傑出した建物をつくるのに利用することが可能です。それが興味深いかかわってくる利点は次のような事実にあります。この駆動力は、わたしたちが要求にそって行うことがらの正しさについての問題を、前もって提起してくれるのです。わたしたちのプロジェクトの大部分については、こうしたアプローチが大きな成果をもたらすことがはっきりしました。ラタビ邸については、このアプローチによってわたしたちは可能な限りの大きな空間を獲得するにいたる方法を見つけ出しました。パレ・ド・トーキョーでは、このアプローチによって、壁と間仕切りに仕上げを施さないままに、最小限の設備という解決法を手にすることができました。このアプローチが可能にするのは、ものごとの序列化であり、重要なこととそうでないことを明らかにすることなのです。

ラカトン：これはもっとよい状況にあれば考えてもみない解決法を探し求めたり提案したりするまたとない機会ではあっても、お金がないからしたいことができないのを正当化する言い逃れの口実にはなりえません。このたぐいのフラストレーションはわたしたちは感じたことはありません。手立てのないことがしばしば困難に輪をかけたことはありましたが、最終的にはそれを言い訳にはしていません。いつだってわたしたちはしたいことを行うのに成功してきたのです。

限られた予算のせいで、できることまた

はできないことに照らして自分の立場を定めることになるのは確かでしょう。ルガーノのホテルのケースについてはこの限りではありませんでした。そこでわたしたちはこう自問したのです。「現実になりたいことがなんでも許されるとなると、よそでは決してしないようなこと、たとえばお金が使えるというだけの理由で化粧材を使うようなことをしてしまうのではないだろうか？」。すぐさまわたしたちは自分たちの仕事の流儀を変える必要はないという結論に達しました。それで空間と構造に対するわたしたちのアプローチはなにひとつ変わっていないのです。結局のところわたしたちにとって豪華さとはどんな場合でも同じものに思われます。すなわち空間の大きさの問題なのです。

ヴァッサル：ルガーノのホテルについては、経済性にかかわるのは建物の配置構成の原理と工事のプロセスであって、そこにあえて高くつく解決法を採るべき理由はなかったのです。このアプローチのおかげで、わたしたちは現行のテクニックに完全に適合し、また配置の問題にかかわるところでは、道理に合わない愚かしいことを難く避けることができる、いくらかそう感じるところもあります。

ラカトン：与えられた予算がさらに限られたものであったとしても、それでもやると決めていたことがいくつか、たとえば全体の配置構成や部屋の配置などがあります。「美しい部屋とは何でしょうか？」——最高に美しい眺めのある部屋のことです。そこからファサードと奥行き寸法の逆転が生まれたのです。その後でわたしたちは付随的な空間、つまりかなり意外性を持ちながらも有用性を欠いてはおらず、なによりも快適さや楽しみ、利便性を補ってくれる空間をつくらうとしたのです。

ヴァッサル：パレ・ド・トーキョーについては、わたしたちに提示された予算は2000万フラン(300万ユーロ)で、表面積は5500m²というプログラムでした。なんとも限られた予算ではありましたが、これなら十分いけるということがつかめたので、わたしたちは8000m²に及ぶ作業を行いました。つまり、5500m²の予算としては非常に限られているとしても、その上をいくことをやっつけのけることが必要だと考えたわけで

す。

ラカトン：結局のところ、豪華さはお金に結びついたものではないのです。豪華さとは、あらかじめ想像できたことを越えるものを可能にするということです。

ヴァッサル：滑らかに仕上げられたコンクリートの床は大理石の床と同じくらい美しいのです。もしも大理石がより安価ならば、それを使うかもしれません。わたしたちには、美的価値の点では、どちらもよいのですから。それならば安価なほうを使うにこしたことはありません。もしガラスがより安価なら、ポリカーボネートの使用は減るでしょうか？ いや、しかしこの2つではクオリティに違いがあります。ガラスのほうがいくらかムラが少なく、少し透明度が高いのです。

ラカトン：またガラスにはリジッドな感じもあって、またそのマッシュは面白味を薄らげてしまうこともあります。表面[積]に関してわたしたちが追求したのは、なにがなんでも表面そのものであるわけではなく、面白味のある表面であり、ヴォリュームを生み出すそれなのです。面積のための面積を確保することが問題なのではありません。キャップ・フェレの住宅では、贅沢さはそれが持つ眺めにありました。ルガーノのホテルでは、すべての部屋が立地の美しさを得られることでした。

ヴァッサル：キャップ・フェレでは表面積に土地占有係数[建ぺい率](COS)による制限がありました。その一方で地盤は非常に傾斜していて、ということは、法規に従うには住宅を複数階に分ける必要があり、そうすると高価になってしまうのです。明らかに、わたしたちには住宅を上高くする必然性はありませんでしたが、しかしより低く下に空間をつくることはなんら興味を引くものではありませんでした。

もしクライアントがたくさんのお金を持っているのなら、わたしたちにしてみれば彼がお金を出すことになにも不都合はありません。肝要なのは、どのようにすべきかを知ることです。ある程度の大きさ、たとえば1000m²が出発点にあれば、表面積を広げてみても仕方がないし、いたるところに大理石を張ることは、ともかくも関心の面では、クライアントに美術品を買う気にさせることにも劣るのです。

実際、このようなコストの問題が根底的なものとなるのは、現行の建設のシステムとの関係においてなのです。いささか奇妙なのは、瓦に瓦、レンガにレンガ、タイルにタイル、大理石パネルに大理石パネルと、おのおの同じもの同士の重ね合わせを続けるというやり方です。このようなことが何に由来するのか、どのようにして生まれたのかを知るなら、あらゆることが異なる世界に属するように見えてくるのです。金属の骨組み構造や囲いのような今日のシンプルで論理的なシステムと比べてみるなら、なおのことそうです。

このように、本質的にはコストの問題はなによりもプロジェクトを異なるやり方で見ることを可能にする駆動力であるのです。なによりもコストを気にかけ、投資の見返りとして得られるものを気にかけているのは、民間のデベロッパーくらいのものでしょう。そんなデベロッパーこそが、空港のロビーがこんなにも高く広くなければならないのをいぶかしがる唯一の存在です。しかし、この疑問は興味深いのです。事実、建設中のあらゆる空港には現に巨大なロビーがあるのはどうしてでしょうか——実際には3.5mか4mの高さの天井でも可能だというのに。そこにはたいした機能もないのです。どうして高さを増しているのでしょうか？ なんととっても人々がそこで過ごすときのために!? それがシンボルであるからなのでしょう。この種の考えを重ねることで、プロジェクトは異なる方向へと導かれていくのです。

ラカトン：またそのことが関係するのは建築のある種の軽やかさであり、それはモニュメントや恒久的な建物という観念から今も残っているものとはまっこうから対立するものです。それらのモニュメントや建物は用途やその時代のためにあるのではなく政治や権力の次元にあるなにかを確定するために存在するのです。今日ではこのような次元はいくらか廃れてしまっています。ここ30年というものの、実際には建物の急速な廃物化が見られます。

それにもかかわらず、機能と建設の原則を掲げどことすることが続いています。その原則においては、始まりも終わりも、建物の寿命も考慮されないのです。こうした現在の状況がわたしたちには興味深いの

です。より軽やかに考えること、それは脆弱さや堅固さの減少ということではなく、工業製品が製造されるやり方とのより密接な関連のもとでということですが、それがわたしたちの関心の多くを占めるのです。自動車が製造されるとき、10年なり何年なりの耐久寿命があらかじめ見通されています。コストと使用の相関値はきっちりおさえられています。建物についても同じことでよいではありませんか。そうすれば建物はより軽やかでより変化可能に、つまり分解可能になり、さらには建物の消滅もそうした枠内に収まるのです。頭の中でこう考えながら作業するのは面白いことです。永続性やら50年先やらのために建てるのではないと……。建築からその重さがなくなるかもしれません。

快適さ、太陽エネルギー、通気、断熱、そしてあらためて温室について

ヴァッサル：わたしたちがラタビ邸という冒険に飛び込んだ理由は、わたしたちには伝統的な住宅がゆったりとした空間には思えず、新しいテクニックを使うことではるかに大きな空間をつくることができるはずだと考えたからです。

そのためには明らかに規制や標準やシステムと闘うことが必要でした。なにか新しいことのためには、目安となる標準のすべてを失うこと、ひっくり返すことが重要だったのです。これがラタビ邸が手づくりの小屋に似ていることの説明となるでしょう。この小屋は住宅に合わせた皮膜を持ち、内部の可動的な諸要素の位置決定がこの小屋を実際に住宅へと変容させています。そうした作業のなかでは、いやおうなくさまざまな慣習に直面し、住居に関する制約や規制にぶつかり、伝統的な一戸建て住宅という無視しえない住居モデルのためにつくられた基準に衝突することになるでしょう。そのような目安を拒絶してしまえば、次はそれとともにあるすべての標準や制約、規定の忘却へと進むのは道理です。そうなれば快適さのシステムとして別のものを想像することが可能になるのです。それは昔の住宅で、たとえば空気が扉の下を通るものとか、古い穀物倉、園芸用の温室、そして手づくりの小屋といったもののシステム

とそう遠くかけ離れてはいないのです。

より大きな空間——10%増しといわず2倍、3倍の空間——をつくるとなれば、住宅の機能が一様ではないことをいよいよ実際に考えてみることになります。断熱され暖房されるエリアと断熱されず暖房されないエリアがあることが考えられるでしょう。これらの空間を互いに組み合わせることもありえます。それから、たとえば、内部での生活が可能になる程度にまで二重のガラス張りの間を思い切って開けることになるかもしれません。

熱にかかわるこれらの問題はつねにわたしたちの興味を引きました。わたしが大学にいた頃、3年目と4年目のときに流行したのは太陽エネルギーを取り入れた建造法でした。それは興味深いものでしたが、その支持者たちはまさしく教条主義的な信奉者でした。全か無か、そのどちらかだったのです。たとえば、温室は受動的な暖房の要素でしかありませんでした。真南向きにしてブロックの壁を使い熱を蓄積する——それで通常の50倍の威力を持つ放熱源になりましたし、その中に入ることなど問題外でした。もちろん温室はそこで生活できるのでなければ興味の対象にならないというのです。ですから、本質的なことは常に、標準や法規、標準で定められた快適さから距離を置いてみることです。

ラカトン：快適さは、標準の上では、規定や数値でしかありません。現実にはなにをおいても感覚であるというのに。幸運にも個人住宅についていえば、行うことのすべてについて、監督機関による制限はありません。一切の責任は自分にあるというわけです。わたしたちは個人住宅の作業についてはそんなふうに行うのですが、なぜなら公共の建物が監督の対象となるようなシステムに従うのではないからです。個人住宅における快適さの判断基準は違ったかたちで決定されるのです。

ヴァッサル：重要なのは、住宅が快適であること、過度に暖房コストがかからないことです。

ラカトン：長年暮らす住人が非の打ち所がなく極めて住み心地のよいと見なす住宅が、標準を外れていると判断され、すなわち快適でないと判断されることだってあるのです。

ヴァッサル：温室は冬季を含む1年の大半は快適なものです。ラタビ邸の温室は見込みよりもはるかに長時間使用されていますが、それでも始終というわけではありません。これは一定していません。事実、この住宅のよいところは、その機能が戸外の現象、つまり熱や太陽や雨などに左右されるいくつかの空間の組合せに基づくということです。そのことによって住宅には豊かさが付与され、この家の人たちはすぐにそれを利用するようになりました。これはクートラの住宅についてもおなじことです。実際住人たちはすぐに熱にかかわる機能を理解し、どのようなときにどの空間にいるべきかを理解したのです。これは温度だけによるわけではありませんが。たとえば夜には、必ずしも漆黒の間に包まれる気にもなれず、もっと大きさが限定されたヴォリュームの中にいるほうを好むこともありうるでしょう。

興味深いのは熱交換なのです。長年にわたってわたしたちはそのことについての作業をしてきました。その始まりはアフリカでした。アフリカの条件は極端なので、熱の問題はきわめて明瞭になります。たとえばわたしの住んでいたニアメーでは、日中の気温は40～45℃に達し、反対に夜間は、それでも相当に暑いのですが、25～30℃前後にとどまるのです。そこで伝統的な住居はわらの小屋です。その原理は日陰をつくり、空気が通るようにすることです。人々は半ば内、半ば外にいるように暮らすのです。もっと北の方では昼の間気温はやや高くなり（およそ45～50℃）、しかし夜間は5～10℃に下がり、したがってその地域ではむしろ放熱源のように機能するシステムが見られます。そのシステムとは日干しレンガの壁が日中太陽で暖められ、蓄えられた熱を夜の間に放出するというものです。

このことがわたしたちに温室の機能を十分に理解させることになりました。それは住居のために使われる暖房システムとは何の関係ありません。実際のところその原理は外部の条件を味方につけ、それを手なずけ、管理し、変容させることなのです。ですからこれは外部から断熱され保護された住居のために行うこととは正反対のものです。

ラタビ邸については、わたしたちは確実に

にこの住宅を暖房できるようにしたいと思いました。しかしその予算はつましく、よるこんでその作業を引き受けてくれるエンジニアはいませんでした。それでわたしたちはADEME（省エネルギー協会）に相談に行きました。そこでわかったのは、一方では園芸用温室における熱の問題に対する取り組みがあり、他方住居においてもその問題は研究されていることでした。もちろん、この2つをつなぐものではなく、別々に扱われています。温室の場合、透明性が重視され気密性に関しては問題になりません。重要なのは太陽であり、通気のシステムであり、透明な要素の寸法の大きさです。住居の場合に取り上げられる問題といえば、グラスウール、熱橋、1～2m²を越えてはならない窓、外部との断熱だけです。

温室は熱慣性は小さいですが、対照的に最小の太陽光によって熱が満たされることが可能で、太陽が照っていれば熱を保持することができるのです。内部は、たとえ外が3℃であっても、25℃を保つことができるのです。すなわち、断熱した住宅に温室を付設すれば、1日の半分はその温室が暖房してくれることになります。

温室に通じて開くドアがあり、太陽が照っている間それを開けておけば、熱が住宅の中に入ってきます。そうになったらドアを閉めればよいのです。すると夜にも熱は閉じ込められたまま外に逃げません。

ラカトン：グルノーブルでは、植物の氷結を防ぐため、温度が5℃になると温室の中にある補助暖房装置が作動します。クートラでは外被が2つあります。温室のそれと、断熱され暖房される住宅のそれです。

ヴァッサル：そこにわたしたちは二重ガラスを使いました。なぜなら現在それは、形鋼とガラスそのものは安くはないとはいえ、通常のガラス張りを行うのと値段は変わらないからです。

ラカトン：先週わたしはクートラに出かけました。同行したのは、わたしたちがミュールーズにつくることになっている集合住宅の現場責任者です。クートラの住宅を訪れることは彼の望みでした。というのも彼はこのタイプの建造について少々心配し、頭を悩ませていたのです。そこで彼は非常に驚いていました。秋も盛りだというのに温室の中は信じられないほどの熱がこもって

いたのです。わたしは自動送風装置は機能しているのだろうかと思い、開閉装置を開く操作を試みました。すると5分ほどで適温になりました。オーナーの女性がやってきたので、わたしはどうして自動装置が切られていたのか尋ねてみました。

彼女の説明によれば、寒い季節この家では温室の自動通気口開閉装置を切って内部の熱を逃がさないようにしておくのだそう、反対に夏は空気を循環させることが必要とのことでした。また彼女は10月でも暖房の必要がないことを説明し、火を焚く必要がないのは村中でこの家だけとも言っていました。この家の人たちはこの住宅の気候にかかわる機能を完璧にマスターしてしまい、温室から引き出される性能を最大限に利用しているのです。

ヴァッサル：それでもエンジニアの計算通りにはいかないものがあります。そこで考えられていないのは住人の存在です。居場所を変え、窓を開け、出入りし、友達を招いたり……そういう住人が。

ラカトン：それから快適さについての個人差もです。25℃でちょうどよい暖かさの人もいれば、18℃で暑苦しいという人もいます。

ヴァッサル：まあ、住宅にはだれかしらいるのが普通でしょう。わたしたちはパレ・ド・トーキョーのときも同じ問題にぶつかりました。エンジニアは通気装置にダクト・システムを取り付けることをすすめました。ところがお客は建物を出たり入ったりしますし、だから通気装置だけでよいのです。そのことを認めてしまえば片付く問題でした。おまけにこの通気装置のほうがより衛生的だったのです。

2001年12月1日、パリにて
(訳=五十嵐光二)

※このインタビューは、「2G」(Editorial Gustavo Gili, SA) No. 21 所収の「A conversation with Patrice Goulet」より再録した。オリジナルは、6つのテーマ＝質問からなるが、ここではそのうちの2つを掲載した。

パトリック・グレイ氏は、1941年生まれ。ジャン・ヌーヴェルおよびマッシミリアーノ・フクサスのモノグラフの著者で、1990～99年、Institut Français d'Architectureの「創造と播種」部門を率いる

ラタピ邸 [1993]

Latapie House, Floirac

Architects: Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Sylvain Menaud
Engineers: Cesma Bordeaux (metal structure),
Ingérop Sud Ouest (foundations)
Client: private
Site: Floirac, Bordeaux, France
Surface area: 185m²
Cost: 55,275 euros (exclusive of tax)
Completion: 1993



きわめて経済的なこの家は、夫婦と2人の子供という構成の家族から寄せられた低予算住居の注文から生まれた。

場所はボルドー近郊の不連続な住宅地域の一角にある。家は道路沿いの敷地の中にすっぽりと収まる。正方形の底面を持つ単純なボリュームである。メタルフレームの構造で、道路側の半分は繊維セメントによる不透明ボードで覆い、庭側の半分は温室としてポリカーボネートによる透明ボードで覆っている。

不透明なボードとメタルフレームの間には木のボードが挿入されて、断熱と保温が施された冬の居住スペースが確保されている。このスペースは庭側と外の道路の両方に向かって開かれている。

この家では、家族の居住形態に応じて2種類の自由な平面が提案されている。すなわち1階の居間とガレージ、そして2階の寝室である。台所、手洗い、トイレ、収納部分といったサービス部分は、中央にまとめられている。

温室は東向きで、早朝の太陽をいち早く取り込む。こもこの家の居住可能スペースである。夏を快適

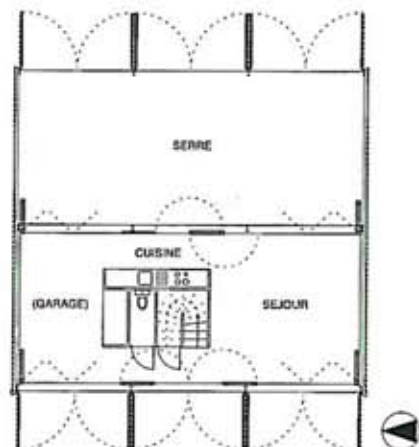
に過ごすために、通気用の大きな開閉パネルが設けられている。

東西のファサードはきわめて可動性に富み、折りたためる開閉扉がついている。すなわち、家は、光、透明性、内輪の雰囲気、保護、あるいは通気といったものの要求、欲求に従って最大限に閉ざされた空

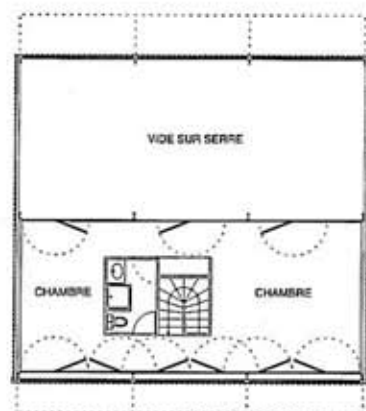
間から最大限に開かれた空間まで自在に変化することができる。

家の居住可能スペースは季節に応じて、居間と寝室からなる極小空間から真夏には庭全体を取り込んだ極大空間まで自由に変化できるのである。

(訳=鈴木圭介)

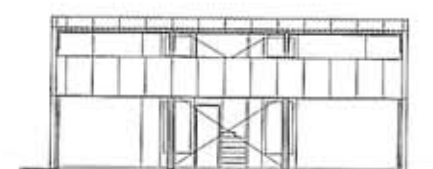
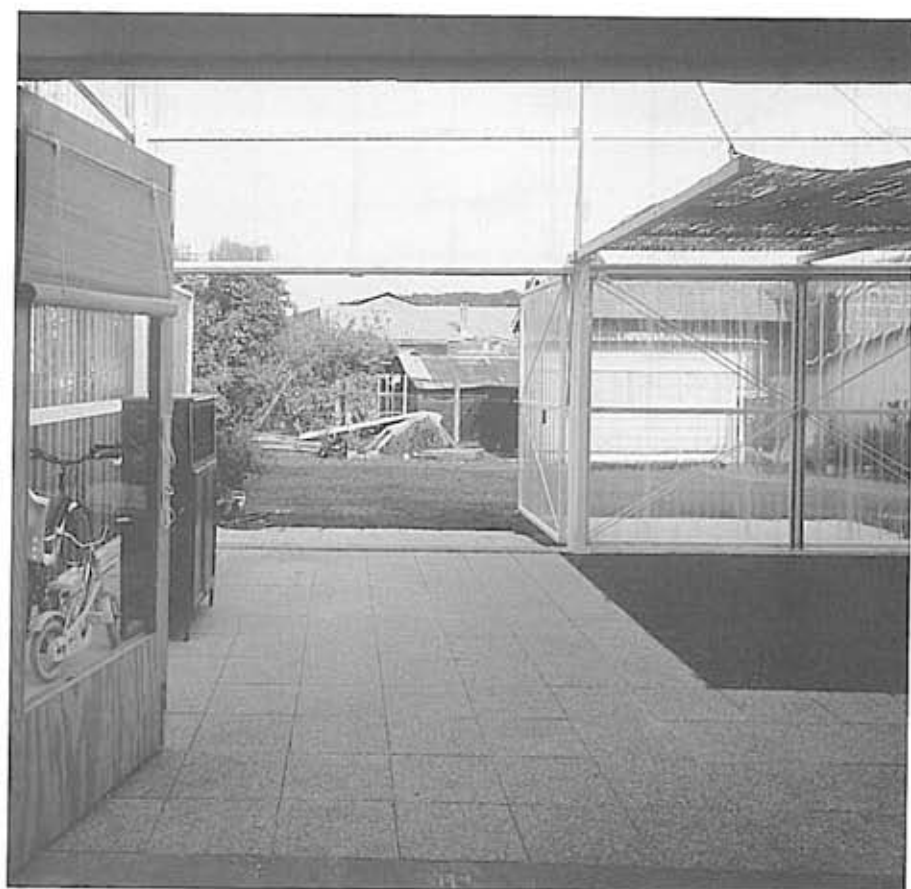
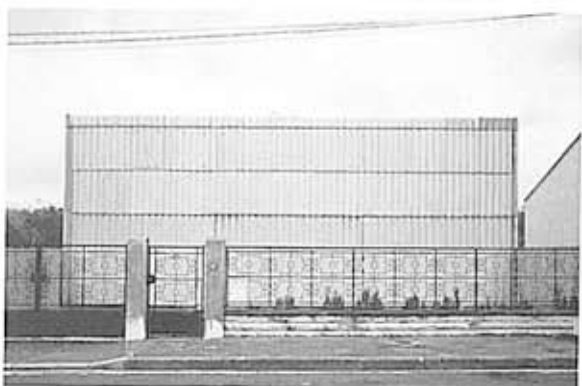


1階平面 S=1:250

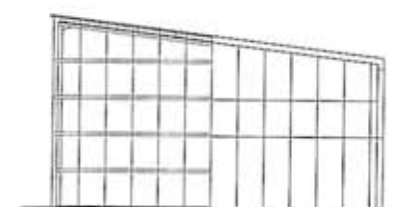


2階平面





西立面 S=1:250



北立面



断面 S=1:250

芸術および人文学部校舎、 グルノーブル [1995&2001]

University of Arts & Human Sciences,
Grenoble

Architects: Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Sylvain Menaud,
Emmanuelle Delage, Mathieu Laporte, Pierre Yves Portier
Engineers: Ingérop Sud Ouest (concrete structure, construction costing), Ingérop Rhône Alpes (systems)
Technical consultants: Pépinières Jean Rey, Lalonde les Maures (bougainvilleas),
Bambouiserie de Prafrance, Anduze (bamboo plantings)
Client: Université Pierre Mendès France, Grenoble
Site: Allée Centrale, Domaine Universitaire, Grenoble, France
Surface area: 5,062m²
Cost: 3,078 Million euros (exclusive of tax)
Completion: 1993
Completion: August 1995 (phase1), April 2001 (phase2)

プロジェクトは、グルノーブルの大学キャンパスの刷新計画「大学 2000」の一環をなすもので、大学の東の軸方向に新校舎を建設しようというものである。

最初の設計競技の段階からプロジェクトは2つの工期からなることが決まっていた。先に1995年に完成した西側の建物は、第2期の建設の終了を待ちながらも自律した建物としてのイメージと機能を備えていた。2001年に完成した第2期の建物の方は、最初の建物と同形ではあるがやや大ぶり、隣りの建物の東側に13m離れて建っている。2つの建物は、3本の高架道路と、南側と北側の主要ファサード沿いに連続的に伸びる温室とによって結ばれ、これによって単一の建物というイメージが生まれている。

教育活動に使われるこの建物は、透明で、キャンパスと周囲の環境の両方に向かって開かれている。周囲の環境とは、グルノーブルを取り囲むようにそびえる高い山脈である。3階建てである。平面構成は、設計主旨に単純正確に対応して、明確かつ機能的なものになっている。

南側と北側の主要ファサードは、植物の生い繁る透明な温室で構成され、植物によるフィルターとなっている。すなわち、

南側——ほぼ1年を通じて花をつけている赤、ピンク、白、薄紫のブーゲンビリア

北側——さまざまな種類の竹

となっている。

こうしてファサードは、建物の用途と、中で行われる芸術教育という活動に見事に合致した、変化に富む詩的で驚くべきイメージを醸し出すのである。

エキゾチックな多様な植物のおかげで、目は山の彼方へと誘われる。

温室は専門の園芸家がつくる温室とほぼ同じ原則に従ってつくられ、同様の自動制御システム、すなわち自動通気、撒水、暖房によって管理されている。プロジェクトには最初からこれらの維持管理を最大限に単純化することが盛り込まれていた。

建物は低コストで建設されている。大学校舎への要求と利用頻度に関する調査報告に基づいて計画されることになった、より大きな校舎を建設するという目標を達成するために、プロジェクトでは終始一貫して経済性の追求がコンセプトにおける課題事項となった。そのおかげで設備や素材や出来上がる建物にいくらかの制約も課すことなく、補助教室、従来より大きなホール、文学通りの出会いの場となる廊下、フロア全体を占める非常に大きくなった図書館といったスペースをつくり出すことができたのである。そしてそのおかげで建物は、単純に必要、便利、重要を優先した現実主義的表現の中から、本質的な美というものを生み出すことになるのである。

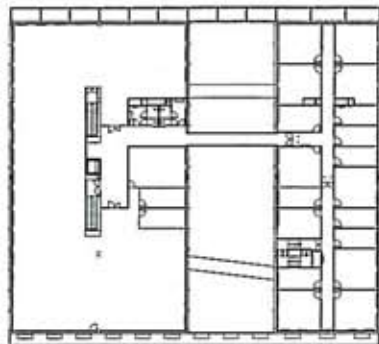
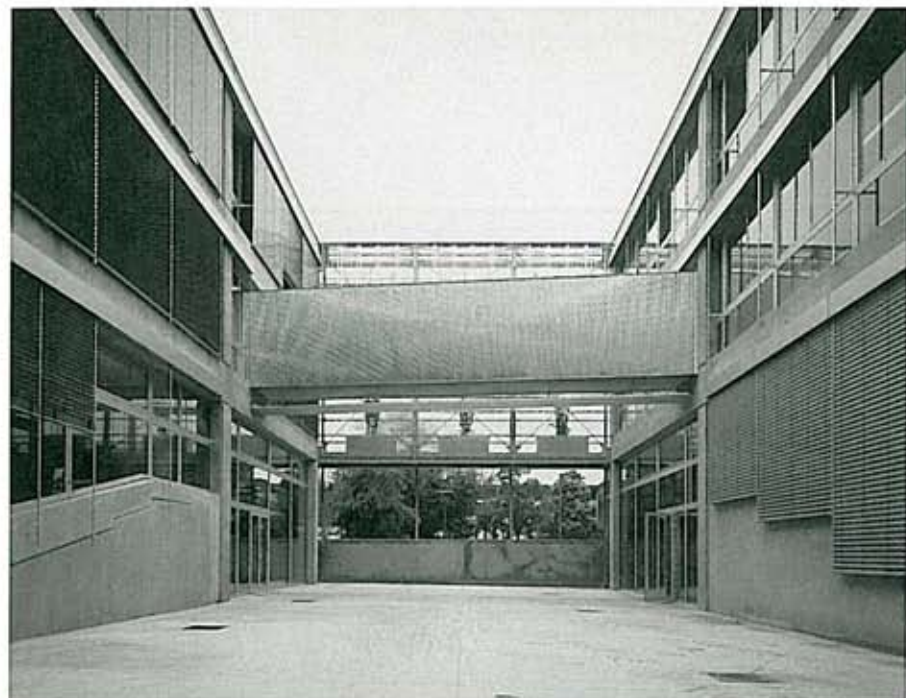
建物の外観は、それを利用する人間の生の営みがつくり出す日常性という現実的であると同時に透明でもあるものを表現している。建物内部の質は、高価なディテールに凝ることよりも、空間構成や雰囲気、採光のやり方、心地よい佇まいといった要素に

よってむしろ上がるものなのである。無駄を省いた効率のよい厳密な建設のやり方と、花々の植えられた温室というイメージと詩情を喚起する思いがけないプロジェクト要素とは鮮やかな対照を形づくっている。

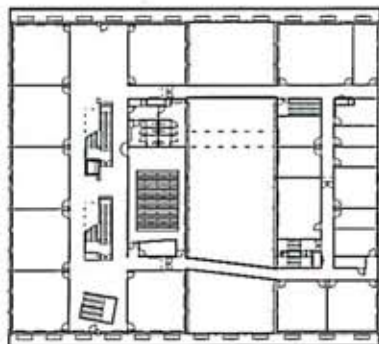
(訳=鈴木圭介)



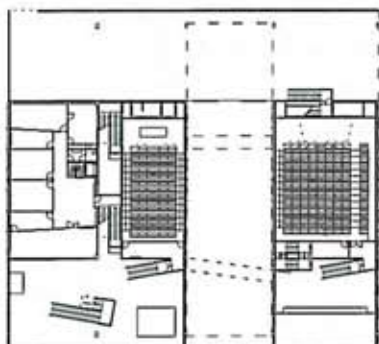




4 层平面



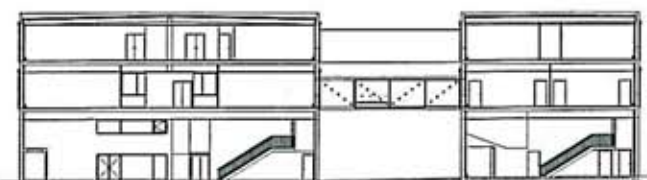
3 层平面



2 层平面



剖面



剖面 S=1:600



1 层平面 S=1:1000

サン・パルドゥー・ ラ・リヴィエールの家 [1997]

House in Saint Pardoux la Rivière

Architects : Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Emmanuelle Delage, Sylvain Meneau
Engineers : Ingérop Sud Ouest (foundations)
Client : private
Site : St. Pardoux la Rivière, Dordogne, France
Surface : 242m²
Cost : 115,000 euros (exclusive of tax)
Completion : 1997



敷地は、ボブラの木々が岸を縁取る川と町に近い、ドルドーニュの田園地帯にある。周囲には、牧草地、胡桃とりんごの農園、木立の点在する畑が広がる。土地は小さな道路沿いの南北方向に伸びた狭いスペースである。

家は低層で、敷地の形状に合わせて、道路沿いに長く伸びている。南北方向の配置のおかげで、向きが理想的で周囲の田園への最良の眺望を得ることができる。すなわち、東側には河と丘陵を、西側には畑を望むことができる。

家は平屋で、山形の屋根が載る。主要部分の居住スペースと、その他の寝室とガレージを含む部分からなる。こうした独立した2部分からなる構成は、家族が希望する住居の利用形態に基づくものである。両部分は中央のスペースで結ばれ、この中央部分も透明屋根付きの居間として考えられており、住居全体が居住可能スペースとなるように設計されている。

西側、南側、東側のファサードでは、全面ガラス戸と全面壁の部分で交替してゆくように配置され、全体として家全体をこの規則的なパターンが取り囲むようになっている。

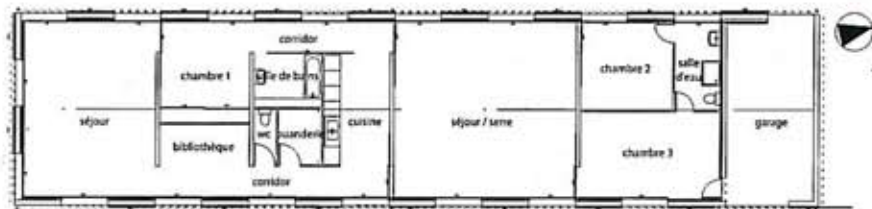
ファサードは建物内部の非常に開放的な平面構成に対応したものとなっている。規則的なリズムでファサードにあげられた開口部によって大きな透明性が得られ、おかげで室内からは田園風景をほとんど途切れることなく、全面ガラス戸に隔取られながら見渡すことができるのである。

壁は、本物の白樺の合板を2枚重ねにしており、居間と寝室部分の屋根も同様の施工になっている。壁面の50%を占める全面ガラス戸はスライド式で、外側にはアルミ製の雨戸がついて外から見えないようにすることもできる。

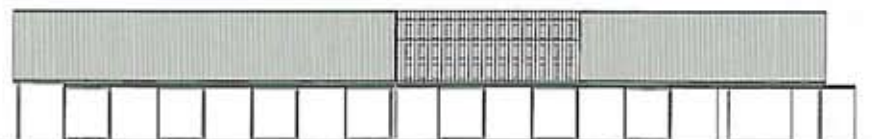
温室部分も居間の一部である。1年の大半を通じて快適な気温のため、常用スペースとなることができる。温室部分では、東側の屋根の棟のそばについた開閉パネルから大量の空気の入れ換えが行われ、ここから部屋の高所にたまった熱を逃がすことができる。ファサードの開閉パネルからも通気が行われる。

この家の空間には、文字通り「気候」を反映した空気というものがある。季節に応じ、1日の時間に応じて、家の中を「渡る」術を身につけた住人は、最良の住感覚を見出すべく、さまざまに空間を変え、部屋を移動して暮らすことができるのである。

(訳=鈴木圭介)



平面 S=1:300



東立面 S=1:300



ルガーノの 5ツ星ホテル [1999]

Five-Star Hotel in Lugano

Architects: Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Emmanuelle Delage,
Mathieu Laporte, Farouk Oudot, David Pradel
Client: Société Accento
Site: Lugano, Switzerland
Surface area: 35,000m² (180 rooms and suites, casino)
Competition: 1999

敷地は、ルガーノ旧市街の入口、湖の縁近くにある珍しい品種の樹々が植わった、とある宏大な庭園である。久しい以前から、この敷地には、19世紀に建てられた豪華ホテルがあり、打ち棄てられ、朽ち果てるがままになっていた。これに、隣接する教会の方は一部が歴史的記念物の指定を受けている。

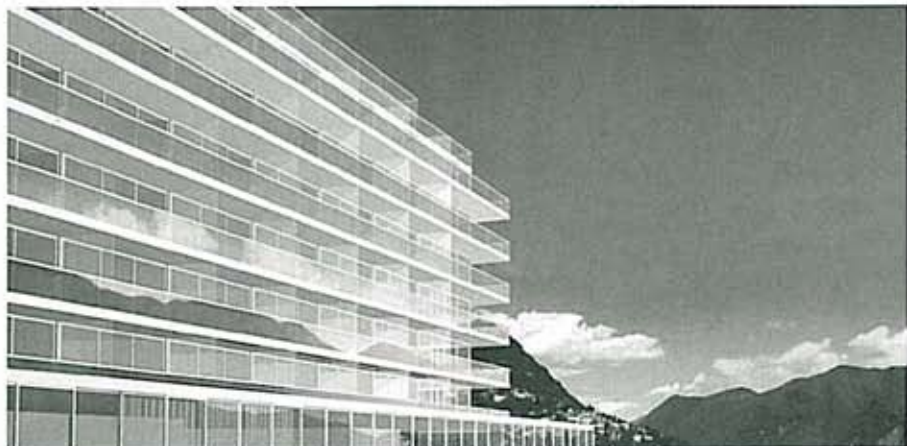
敷地の質が例外的なまでに高く、しかも美しいことは、プロジェクトの基本要素として考慮されていた。植生の保護は、我々が自らに課した主要課題のひとつである。プロジェクトでは、敷地上方へずっと伸びながら生えている南側のきわめて美しい木立を保存する一方、建物内部からは最大限に広々とした景観が見渡せるように努める。

建物の周囲に配置される個室およびスイートルームからはすべて、湖、市街、あるいは公園を望む美しい眺望が得られる。伝統的なホテルルームの配置法は逆転される。最も長い (7.2 m) の部屋は奥ではなくファサード側に配置され、最も大きなパノラミックな眺望が得られるようにする。床から天井までの高さの引戸式の全面ガラスによる3枚のパネルを開けると、ガラスパネルのはまった手摺りのついた広いバルコニーやテラスに出られる。ガラス壁で仕切られた浴室からは、部屋越しに同じ景観を見渡すことができる。

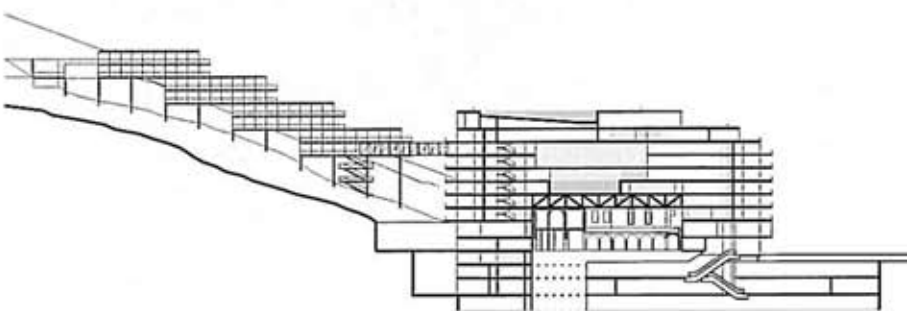
個室とスイートを4辺にぐるりと配置したフロアには独特な雰囲気を持つ内部空間が出来上がる。そこには、個室の雰囲気ともまた違った、非常に良まった雰囲気というものがある。

廊下を走らせる古典的なやり方を排し、代わりにきわめて広大な中央スペースができたことで、ホテルの宿泊客専用のさまざまな利便、娯楽施設を収めることができる。すなわち、ジムおよびフィットネス施設、スカッシュ室、現代美術ギャラリー、屋内プール、大画面テレビ室、水族館、蘭の温室などである。中央部分は人工照明によっているが、フロアによってはきわめて規則的に自然光の供給が行われる。

東側と南側のファサードでは、打ち棄てられたホテルのファサードの威厳と力を復活させる。すでに旧ホテルのファサードの残骸は撤去されてしまっている。その代わり、新しい建物には、古い豪華ホテルの一部の寸法が正確に引き継がれることになる。新しいホテルのファサードは、8階のフロアまでは古いホテルのファサードの寸法に対応し、それを正確に再現する。その上の9階と10階はセットバックがついて、外観上のインパクトを減らすようにする。この建物の中に収めることのできない部屋は、敷地の上方に展開する別棟に収める。こちらは、ルガーノ湖側のファサードに面した3階部分のプラン構成に従い、敷地の斜面形状に合わせて旧ホテルのテラ



断面



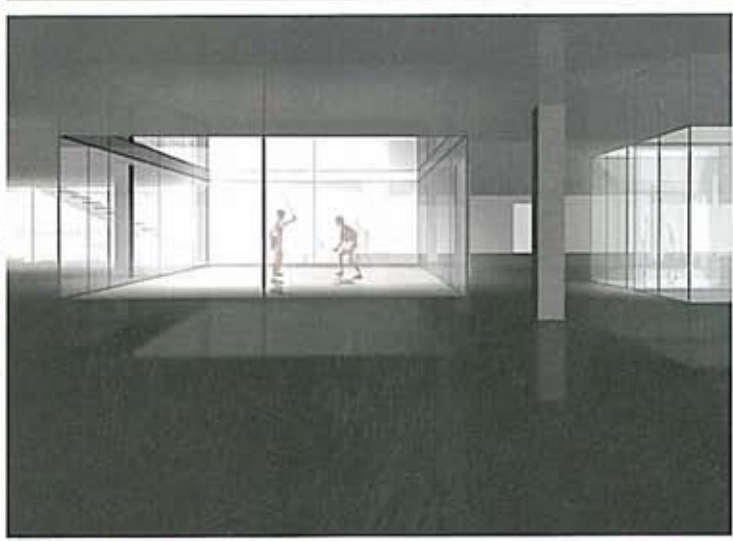
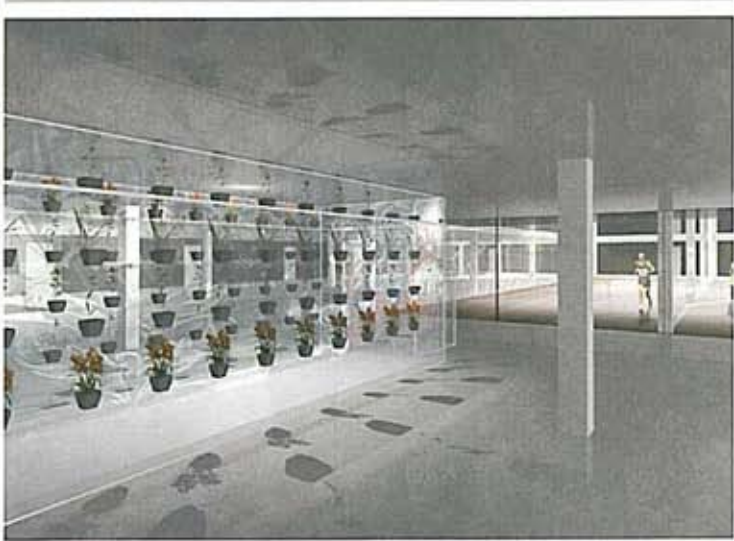
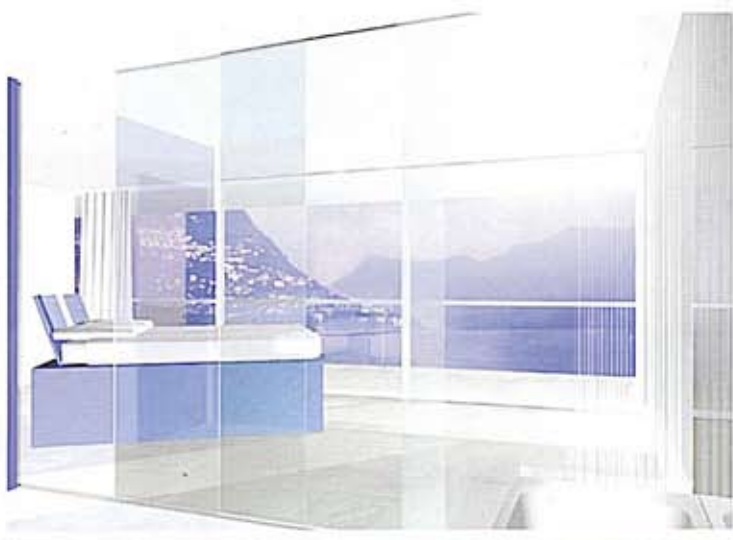
断面 S=1:1600

ス構造を踏襲している。この別棟はピロティによって斜面の上に持ち上げられ、段をなしていることで、個室もしくはスイートからは、南側は公園を、東側は湖を教会とホテル本館越しに見渡すことができる。こうしてこの別棟は敷地の上方とのつながりを取り戻すとともに本館8階とはガラス張りの通路を介してつながるのである。

ホテルのフロント、レセプションルームは1階、専門料理のレストランは2階、ホテルの食堂とバーは10階という特別な場所にあり、広いテラスからは

湖が一望できる。プールとそのテラスは、本館11階のフロアを占める。

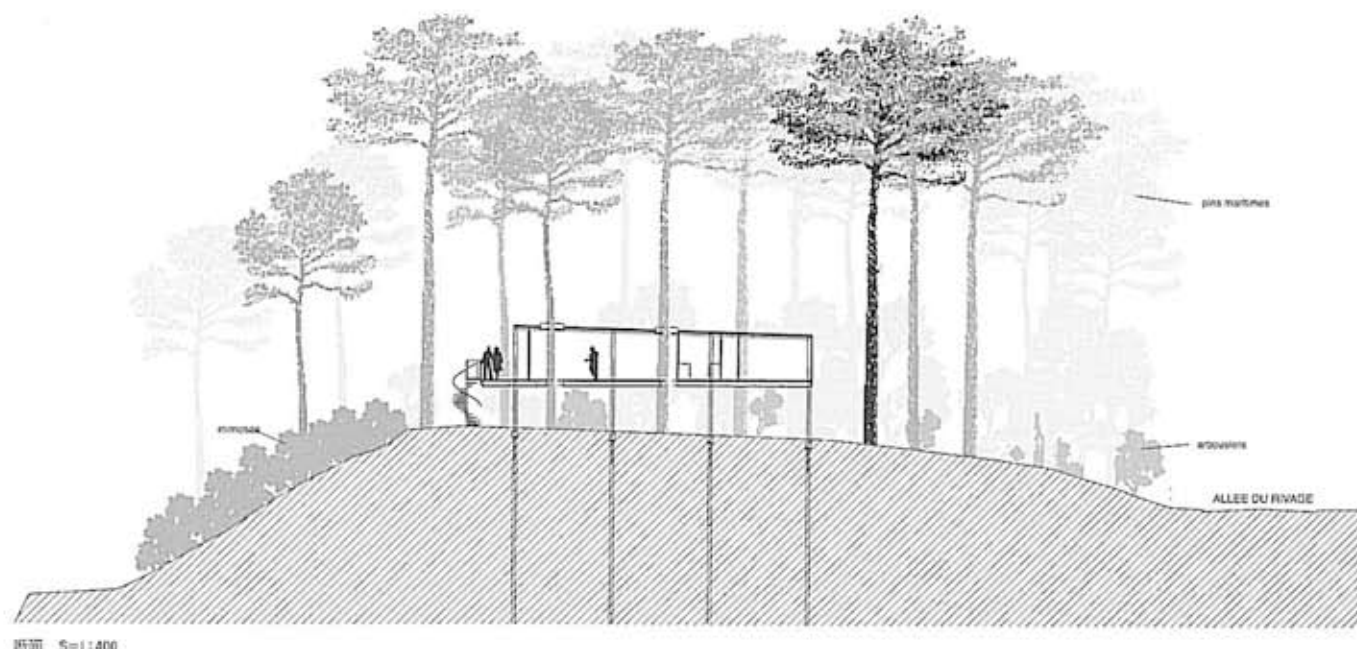
建物そのものは現代建築である。その非常な透明性によって、デリケートな敷地に巨大な建物建てた場合の外観的インパクトを最大限に軽減して、なおかつルガーノ湖のすばらしい景観をいっそう引き立てることができるのである。(訳=鈴木圭介)



レージュ、キャップ・ フェレの家 [1998]

House in Lège, Cap Ferret

Architects : Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Sylvain Menaud,
Laurie Baggett, Emmanuelle Delage, Christophe Hutin, Pierre Yves Portier
Engineers : Cosma Borneaux (metal structure), Ingèrop Sud Ouest (foundations)
Technical consultants : Inra (wood rheology), Mr Moussion, Caeu 33 (phytosanitation)
Client : private
Site : Lège, Cap Ferret, Gironde, France
Surface area : 180m², terrace 30m²
Cost : 123,000 euros (exclusive of tax)
Completion : 1998



敷地は、アルカシオン盆地にあるグラン・ビケに位置する南東に向けた土地である。そこはそのあたりで建物が建てられずに残っている最後の土地のひとつである。非建設地域であったがために、自生の植物があたりのかなりの部分を覆っている。すなわち、40本余りの松の成木、かなりの横幅に達した地中海ツツジ、そしてミモザの木が盆地に面した砂地の斜面に生えているのである。敷地には起伏があり、川沿いの小道からおおよそ40mにわたって平均7%の不規則な上がり勾配となっているほか、西方向にも20mにわたり約10%の同じく不規則な勾配がついていて、これによって自然にピライヤン港が見渡せる。頂界線を越えると斜面は盆地に向かってさらに急峻になる。土壌は砂地である。

隣りの敷地にはかなり前から家が建っている。すなわち、複数階からなる小ぶりの2軒の住居で、どちらも格子状の橋のかなり近く(2.5m)に建てられている。

敷地の大きな美点を考慮して、建物および景観設計においては、土地の特徴、すなわち地面の形状と植生を保存することを目標にした。そのため、土地の傾斜に従って段を重ねたことさらに重いテラス構造にすることを避ける。むしろ砂地の脆い土壌を考慮に入れる(安定性)。盆地側から見ると特に際立った姿を見せる植生を保存するため、松の木は切らず、地中海ツツジの低い木立も伐採しないようにする。

家は、1層のみで、大きなグリッドをなすように埋め込まれたピロティの上に載っている。これにより基礎部分(細い杭)のコストと外観的インパクトを軽減することができる。盆地側にはテラスがつく。

構造はきわめて細身の、メッキ処理をした鉄のフレームからなる。盆地側のファサードは、全面がガラスである。残りの3面は、アルミの壁と全面ガラス戸が交替するように配置されている……。

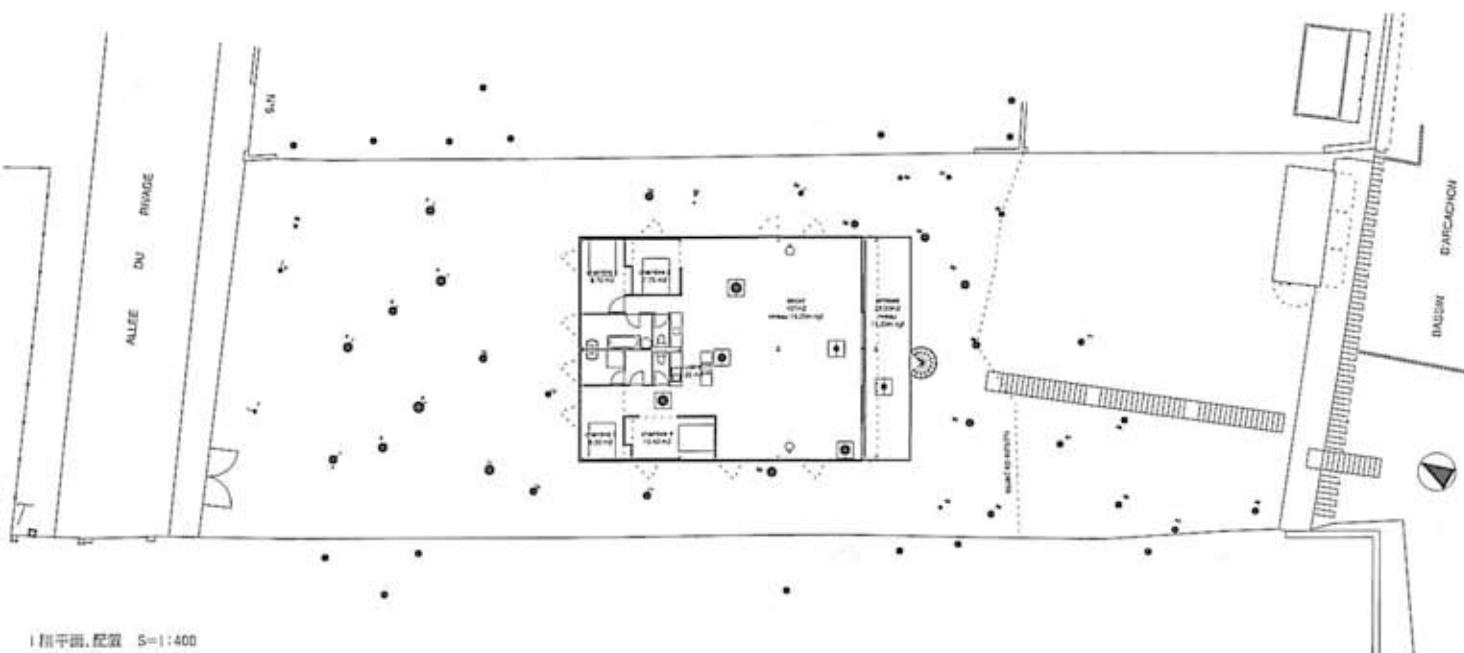
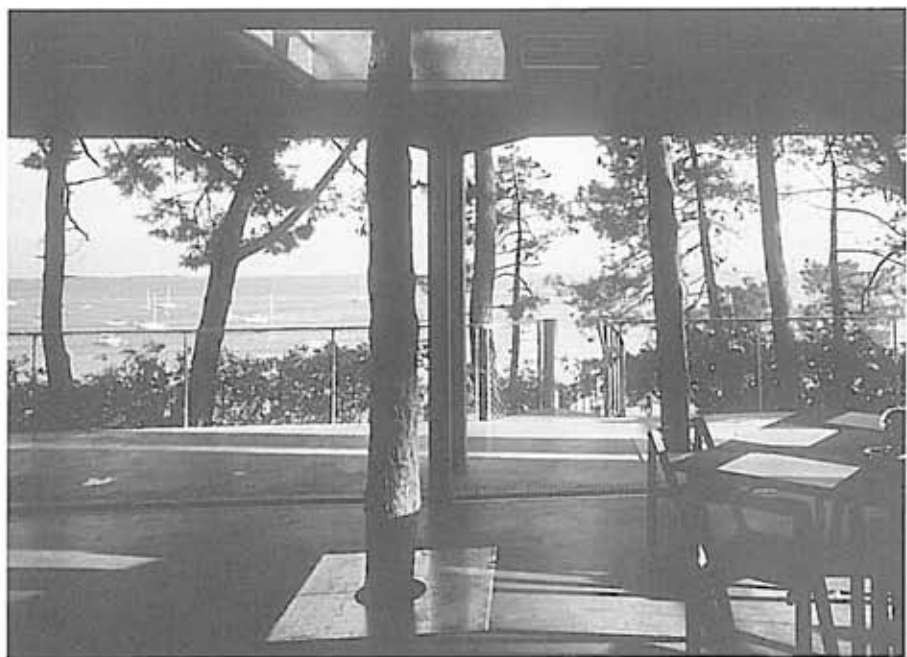
プラットフォームの床板はコンクリートである。この床板から下の地面までの高さは、1.5mから3.5

mまでさまざまであるが、いずれにせよつねに下を通り抜けることができる。天井の裏面には、側面ファサードのアルミと同系材の板が張られている。屋根は屋根テラスである。

建物全体の外観、その軽くて透明な構造は景観の中で建物としての際立ったインパクトをあまり与えない。低木の繁みはプラットフォームの下で保存されるだろう。

松の木立は、建設部分に生えているものまで含めて保存される(ただし、生育状態の悪い2本の松だけはその例外)。建設部分の松は、安定度や成長度や健康な状態での維持を見込んだ上で家を貫通するようにしている(こうした特別な観点からの予備調査は、国立農業研究所の樹木レオロジー・センターと協力してきわめて慎重に行われた)。海辺に沿って積まれた伝統的な石積み擁壁がこうして木の擁壁として甦った。

(訳=鈴木圭介)





クートラの家 [2000]

House in Coutras

Architects: Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Emmanuelle Delage,
Christophe Hutin, Sylvain Menaud
Greenhouse manufacturer: Filclair
Client: private
Site: Coutras, Gironde, France
Surface area: 290m²
Cost: 64,800 euros (exclusive of tax)
Completion: 2000



フロワラックのラタビ邸に続く、これは非常に経済的な住宅建設の2番目の例である。敷地は、ボルドーの西 50 km のところにあるクートラ周辺の田園地帯に位置する。敷地はきわめて細長く (33 m のファサード長)、農業中心地域を走る村道に沿って伸びている。周囲の環境は、まばらな住居、普通木と低木の繁みが生きこに散らばる農耕地、(野菜と花の) 集約栽培用のビニールハウス集落からなっている。植生も建物もまばらで、きわめて凹凸の少ない空間が広がっているため、いやが上にも空が大きく見える。

家は、他の家や道路から距離を取るために、村道から 30 m 引っ込んだところに建てる。家は、円形のビニールハウスを2つ隣り合わせに並べた構成になっている。これは、農業用の標準的なビニールハウスで、メタルフレームが入り、丈夫な透明シートで覆われている。周囲の壁の 50% が引戸式の扉になっていて開けられる。これをさらにポリカーボネート製の透明ボードで覆い、ところどころで不透明なボードを使って隠すべき部屋は隠すようにする。

室内温度は、ビニールハウスの基本装備であるいくつかの自動制御装置、ことにそれぞれのハウスの屋根に取りつけられた通気用開閉パネル (屋根面の 50% を占める) によって行われる。この開閉パネル

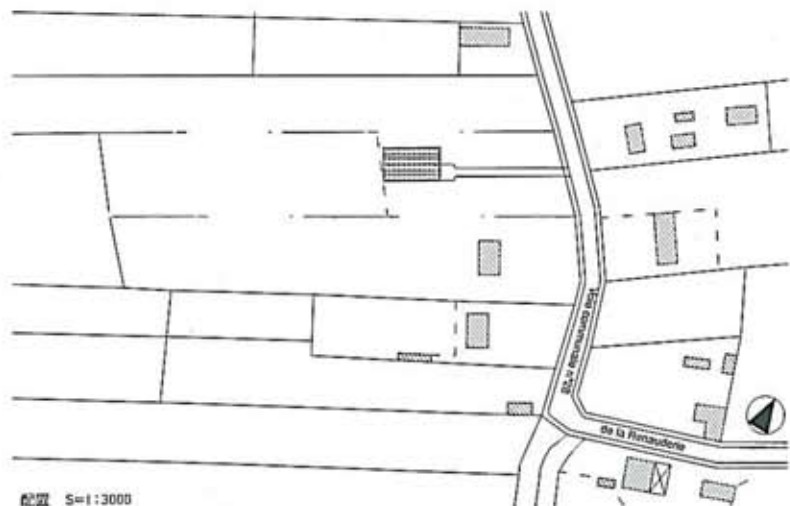
は室内気温の状態に応じて開き、雨や風の際には安全のために自動的に閉まる仕掛けになっている。

建物の平面は、それぞれ 150 m² の2部分からなる。すなわち、居間、台所、寝室といった伝統的な部屋は、木のボードで覆って独立させた片方のビニールハウス部分に収められ、これが西側を構成する。この部分は戸外と、もう一方の東側のビニールハウス部分、すなわち温室庭園とに向かって開かれてい

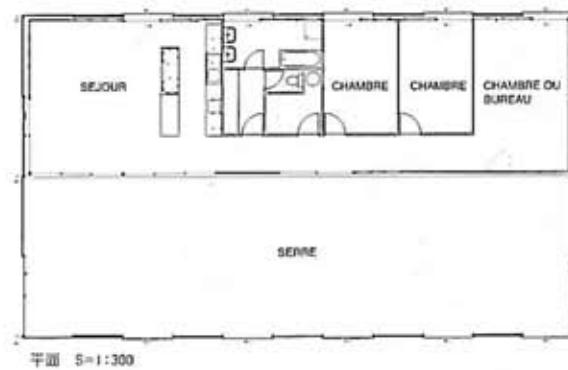
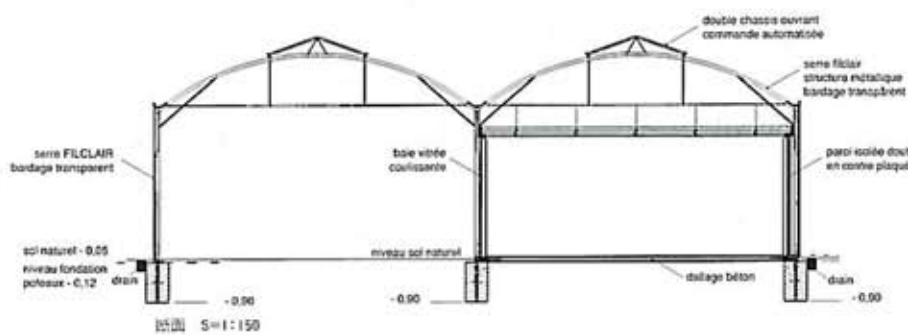
る。

ビニールハウスという選択はただちにクライアントに受け入れられることになった。これによって、より広い建物を低コストで建てられる上に、利用や応用の可能性が豊富で、室内の雰囲気や生活の気分をさまざまに変えられ、簡単に便利な仕掛けによって室内温度調整を行うことができるのである。

(訳=鈴木圭介)



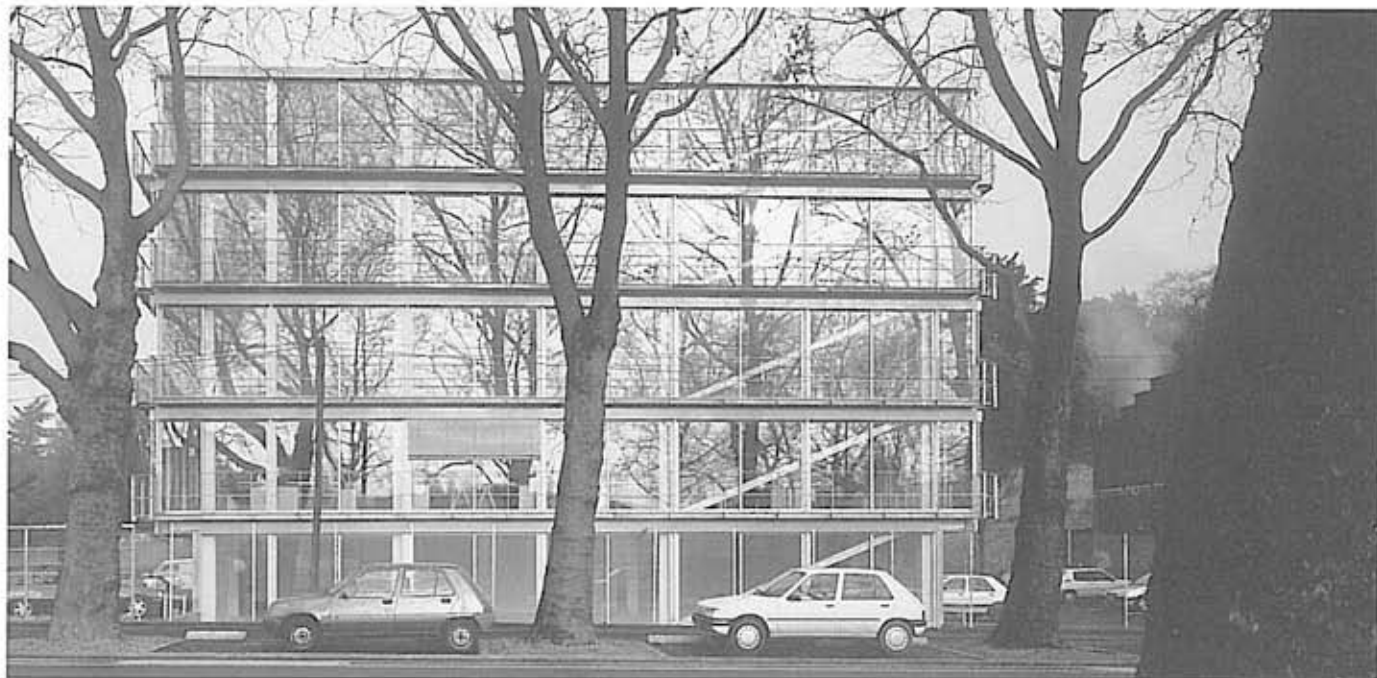




ナントのオフィスビル [2002]

Office Building, Nantes

Architects : Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Emmanuelle Delage
Engineers : Cesma Bordeaux (metal structure), Ingérop Sud Ouest (foundations, construction costing),
Louis Choulet (systems)
Client : SCI Cardiff
Site : Nantes, France
Surface area : 2,735m²
Cost : 1,842 Million euros (exclusive of tax)
Completion : January 2002



このオフィスビルは、ナント近郊の周縁地域の中の発展しつつある地区にある。敷地は、南側がロワール河の緑の再開発中の工業地帯に沿って走る樹木の植えられた通りによって、東側と西側が小工場の建物によって、そして北側が木立の繁る大きな公園の下を通る廃線になった鉄道の線路によって限られている。

敷地中央部分に建物を配置するという都市計画の原則を応用することで、床面積を最大にでき、したがって収益率も最大にできるほか、必要な駐車スペースも確保できた。

建物は5階建てである。各フロアは、仕切らずに自由な平面となっている。1階は、建物を通ずるホールによって両側の駐車スペース同士を結ぶとともに、建物内をそれぞれ専有スペースを持つ2つのオフィス部分に分けている。建物中央を垂直に貫くシャフト部分には、2基の階段、2基のエレベーター、トイレ、配管、設備室が収められる。このサービス・スペースが最小限に切り詰められているおかげで、オフィス内の有効活用スペースを最大にすることができた。

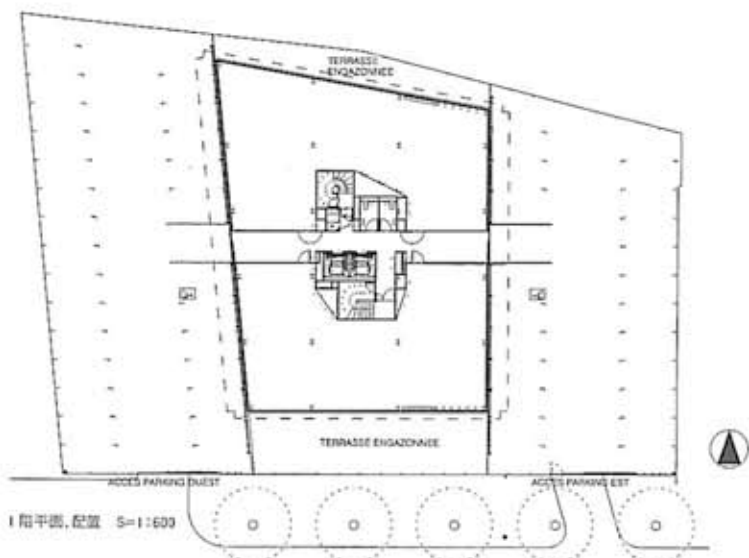
構造はメタルフレームである。柱の断面は階がのぼるにつれて細くなってゆく。床は滑らかなワックスをひいたコンクリートで、下にはリブ入りの鋼板が入っている。駐車スペース沿いの部分以外のファサード面は全面がガラスで、引戸式である。鉄格子状のバルコニーは建物の周囲に差し渡され、すべてのフロアで外へ出ることができて、ガラスのメン

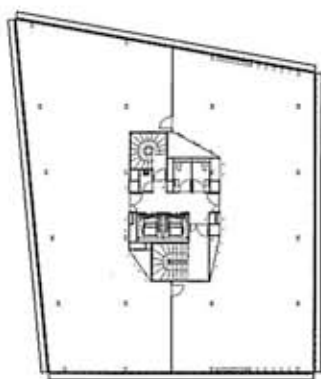
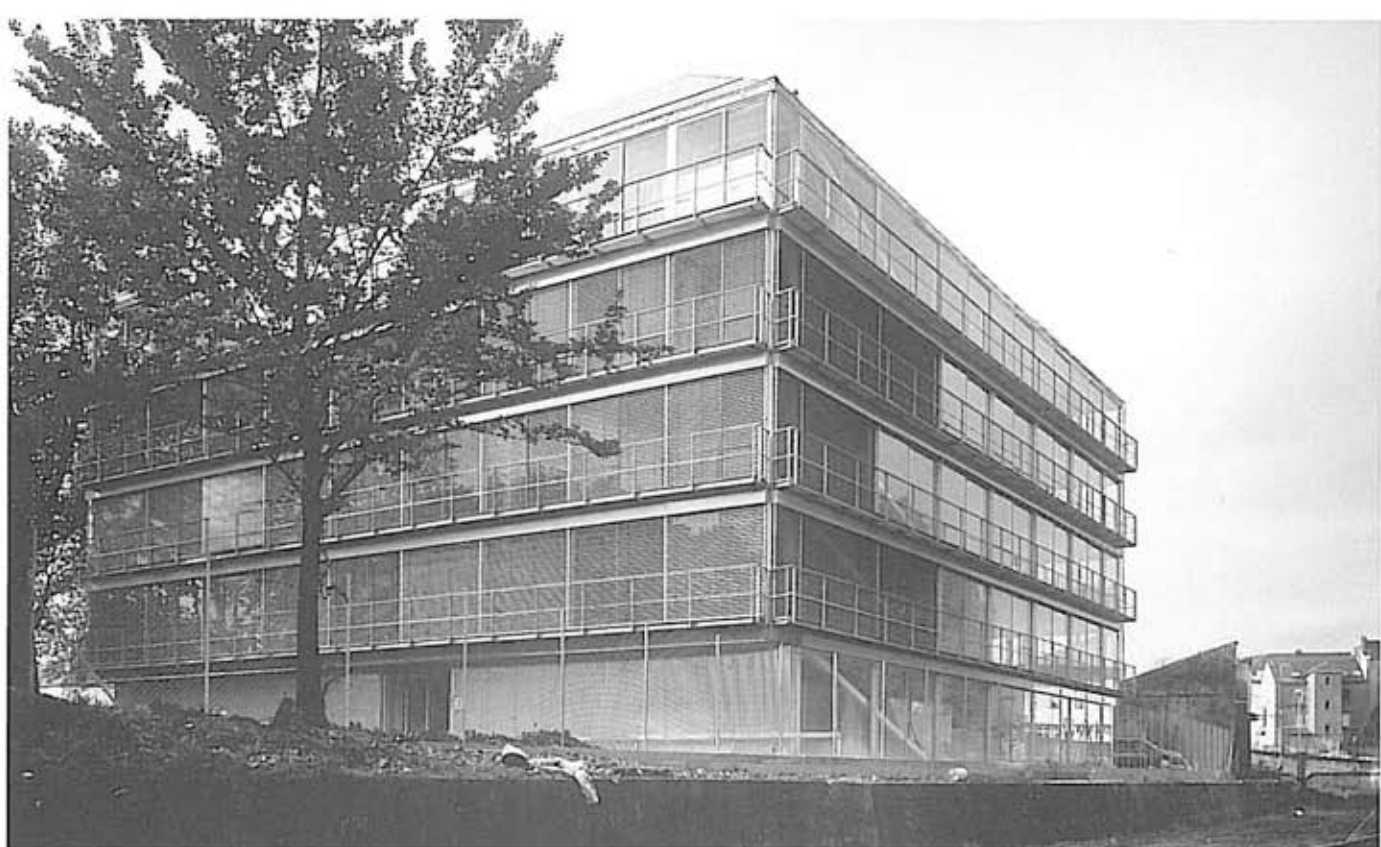
テナンスがやり易いようになっている。ブラインドは、風速計と連動して電動で羽の上げ下ろし角度調節を行うことで、すべてのファサードで太陽光の調節やプライバシーの保護を行うことができる。建物はこうして大変良好な自然光に恵まれ、4方向に対して遠近の別なく広々とした眺望を得ることができる。

屋根は傾斜した4面からなり、中央には外に出ることのできるスペースを持つ。これによって屋上テラスに技術設備を設置できるとともに、ビルの利用者全員が使える完全な屋外スペースが生まれるのである。

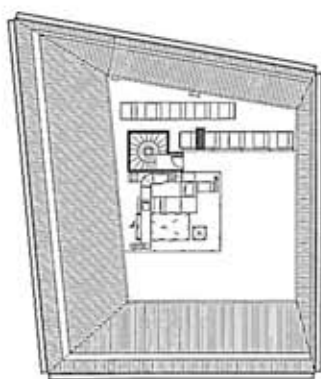
各種設備は天井にまとめられる。すなわち、押込み式電源ソケット差込み口、電源ケーブル、冷暖房システムなどである。この冷暖房システムは、天井にポリプロピレン製チューブを張り巡らし、気温が低いときは温水を、高いときには冷水を流すことで温度を管理する。

フロアはオープンスペースとなっているが、仕切って使うことも可能である。建物は厳密なグリッド（ファサード、設備部分の配置）を構成しているの、仕切り壁はちょうどファサードの垂直材にはめ込むことができる。オフィス内のグリッドはテナント側の判断に委ねられている。（訳＝鈴木圭介）

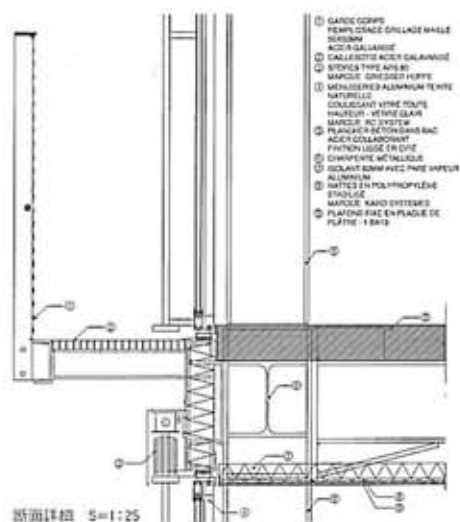




基準階平面



テラス平面



ウィーンのカフェ [2001]

Café in Vienna

Architects : Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Mathieu Laporte, David Pradel
Stephan Seehof (architect, Vienne, construction), Asliye Kolbay-Kafallier (artist, Vienne, ceramic conception)
Ceramic manufacturer : Gerbon, Istanbul
Client : Architektur Zentrum Wien
Site : Vienne, Austria
Completion : October 2001



敷地のコンテキスト——メッセバラストから美術館地区にかけて。

元の建物——旧帝国厩舎。

建物は軍隊風で、いかめしく、威圧的である。中庭から見上げる建物によって録取られた空さ、規律正しい印象である。芸術家たちが占領するこの一帯は、反動的で、楽天的で、不作法で、暴力的で、反抗的で、軽々しく、つねに移り気で変化してやまない。

美術館地区のこのプロジェクトは、決定、調査、工事へと至るまで15年を要した腰の重いプロジェクトである。

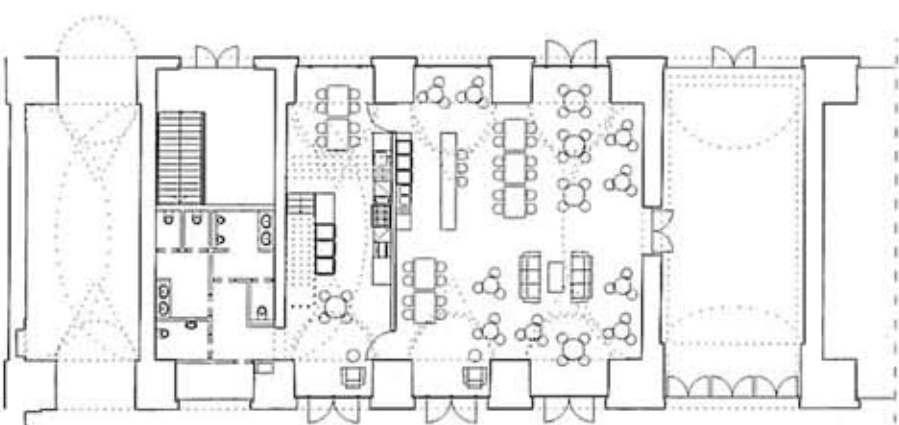
美術館ができると、なぜ物事は動きを止め、固まることが多いのだろう。人はもはやそこに生きることをやめ、眺めるだけになる。役者という役割から見物人の役割に移ってしまう。いわゆる「美術館化」してしまう。反抗から既製芸術へ、移ろいやすい存在から何もかもきっちりと決定された存在へと移行してしまうのである。軽さというものを見つけないといけない。

アルヒテクトゥーア・ツェントルム・カフェというプロジェクトは、現在行われているような各方面に合意を取りつけるお役所仕事のプロジェクト、つまり、かつてはこの場所にあった軽さや生き生きとした精神といったものとはほど遠いものに対する抵抗である。たんに我々は、大きな青い空、一種の大いなる気晴らし、夢のようなものが欲しいだけなのだ、そんな風に思われた。

アルヒテクトゥーア・ツェントルムの熱っぽい雰囲気は損なうどころか、むしろそれを強化するのである。建物は元のままで少しも気どったところがなく、あたかも工事がまだ完全に終わっていないの



撮影=David Pradel



平面 S=1:300

かのような佇まいである。そうやって重要な出来事、つまり展覧会やそこに姿を見せようとする建物をもっとよく際立たせようとしているかのようである。

今回のカフェの改修では内装面にしか手を加えていない。床と壁はそのままの状態である。唯一、丸天井は東洋の場所や建物を思い起こさせるセラミックのタイルで覆った。タイルのデザインはウィーン在住のトルコ人画家が行った。タイルはイスラム

ールで焼かれている。

食堂部分と厨房の分離は、剥き出しの石積みの壁という大胆な手段によって行っているが、この石積み壁はまるで昔からそこにあったかのようにセラミックタイルとよく調和している。屋外からでも、あるいは厨房を通してトイレへ行くときにもセラミックの連続性が意識されるようになっている。

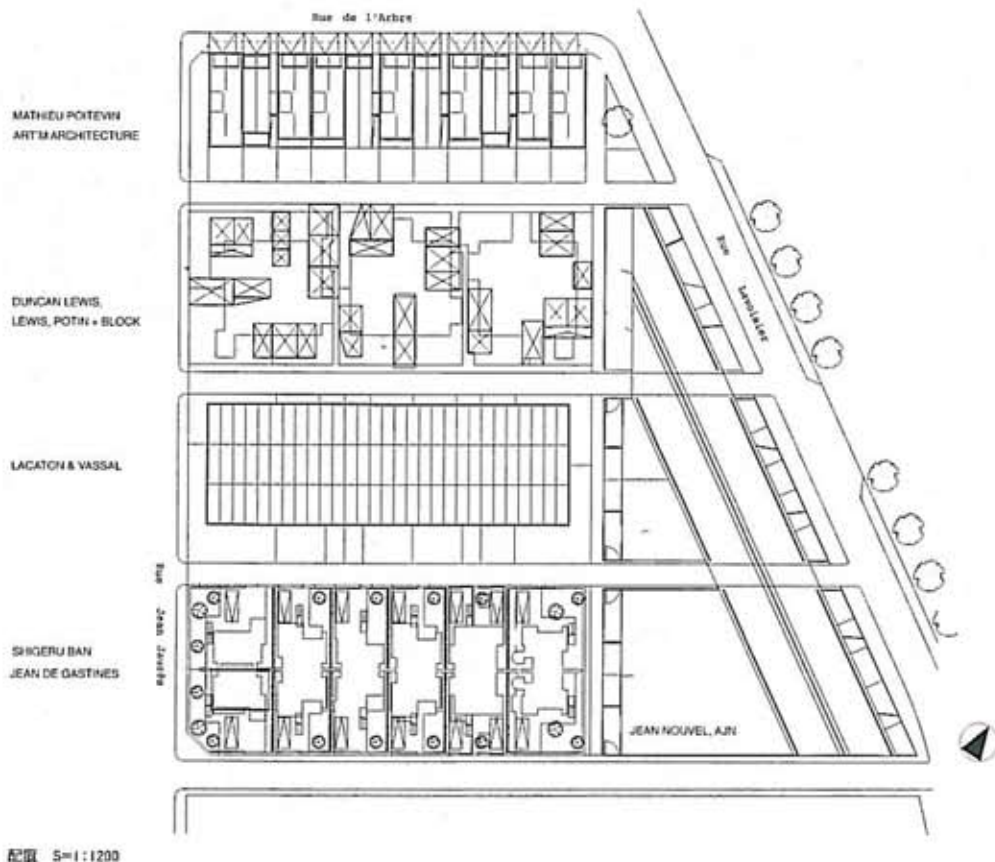
(訳=鈴木圭介)



ミルーズの住宅 [2001-2003]

Houses Mulhouse

Architects : Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with David Pradel, David Duchemin
Engineers : Loeb Ingénierie SA (foundations, concrete structure),
Inotec (systems), Espace Economie (construction costing)
Client : SOMCO, Mulhouse
Site : Ilôt Schoettle, Mulhouse, France
Surface area : 2,227m²
Cost : 859,584 euros (exclusive of tax)
Project started : 2002
Completion : 2003



配置 5=1:1200

この住宅プロジェクトは、ミルーズの労働者都市の延長として計画された60戸の住宅建設の一環である。ミルーズ労働者都市協会によって推進されるこの労働者都市プロジェクトは、住宅コンセプトとその建設をめぐる状況に対するマニフェストとなるに違いない。5組の建築家チームが共同でプロジェクトに参加している。すなわち、坂茂・ジャン・ド・ガステーヌ、ジャン・ヌーヴェル、マチュー・ボワトヴァン、ルイス・ボタン+ブロック、アンヌ・ラカトン&ジャン=フィリップ・ヴァッサルである。

低家賃住宅プロジェクトは、スペースと住み心地が最低限におさえられるという厳しい制約のなかで住戸を入念な配慮のもとに正確にきっちりと組み上げてゆくといいかたちになりやすく、そのために古典的で伝統的な住宅モデルを固定化し永続化させてしまうことになる。

今回のプロジェクトにおいて、我々の目標は、質が高く、しかも低コストで従来のものよりはるかに広い住宅をつくるということにあった。これまで手がけた個人住宅での経験や、農工商の各分野で使われる作業、生産、営業施設などのいわゆる「ロフト」物を見てきた経験から、我々は従来のものより広く、

開放的で、自由で、明るく、住み心地のよい、それでいて安価なものをつくると確信した。

このプロジェクトは、以下のような順序で構想されている。まず、構造を決め、そして単純で経済的で効率のよい全体の外形を決めることで、最大限の大きさの平面とヴォリュームが決定される。しかもこのヴォリュームは、相互に対照的かつ捕完的で、驚くほど質の高い空間を持っている。次に我々は、このヴォリュームを住戸へと分解するが、住戸には追加スペースがつく。

1階の構造は鉄筋コンクリートで、柱、梁、床で構成されている。天井高は重要で、3m以上ある。ファサード面の大部分はガラスで、開閉パネル式になっている。この1階のコンクリートの台座の上に温室が載る。この温室は園芸農家が使う業務用のタイプのものである。構造はメッキ処理をした鉄のフレームで、外壁は透明なポリカーボネート板である。温室の一部は断熱され暖房されている。あとの部分はそのままの形で使い、温室庭園となる。内側の中間ファサードは、大きな全面ガラス戸を介して温室庭園に向かって開いている。温室は屋根につく大きな開閉パネルと、ファサードの50%を開放することの

できる引戸式のパネルによって通気が行われる。温室内部には木陰を水平に並べる。温室の原理と、その温度調節の方法を使い、さらには自動制御でその調節を管理することによって、自然換気の快適さを追求することが可能になるだろう。

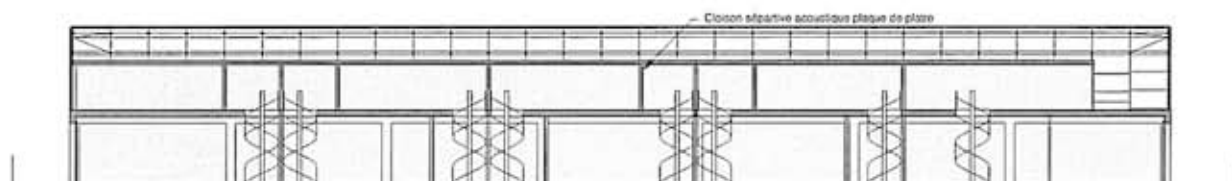
この最適な形に定められたヴォリュームの中には、12世帯の家族が入り、彼らは多様なスペースからもたらされる質の高い生活を平等に享受することができる。住戸同士は互いに一方の一部が他方の一部に食い込むように組まれている。各住戸は2階構成で、平面構成は不規則で、主平面が1階にある場合と、2階にある場合とがある。居間は、陽当たりのよいファサードに面する、少なくとも8mの長さを持つ直線的形状である。

(訳=鈴木圭介)

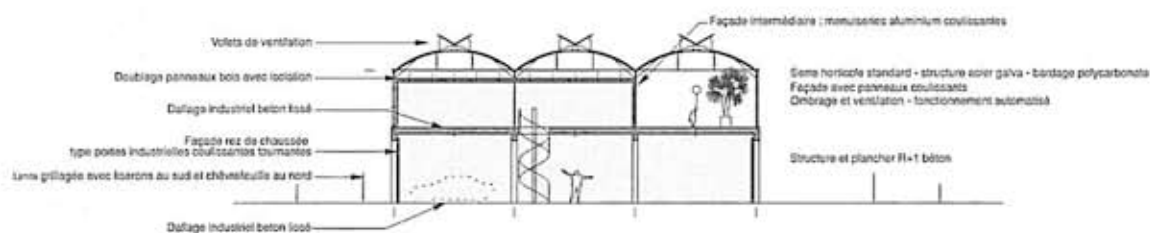




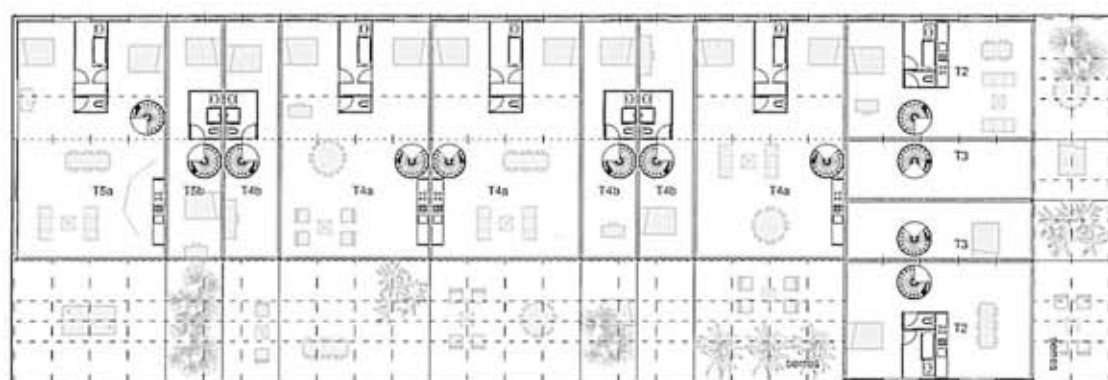
立面 S=1:400



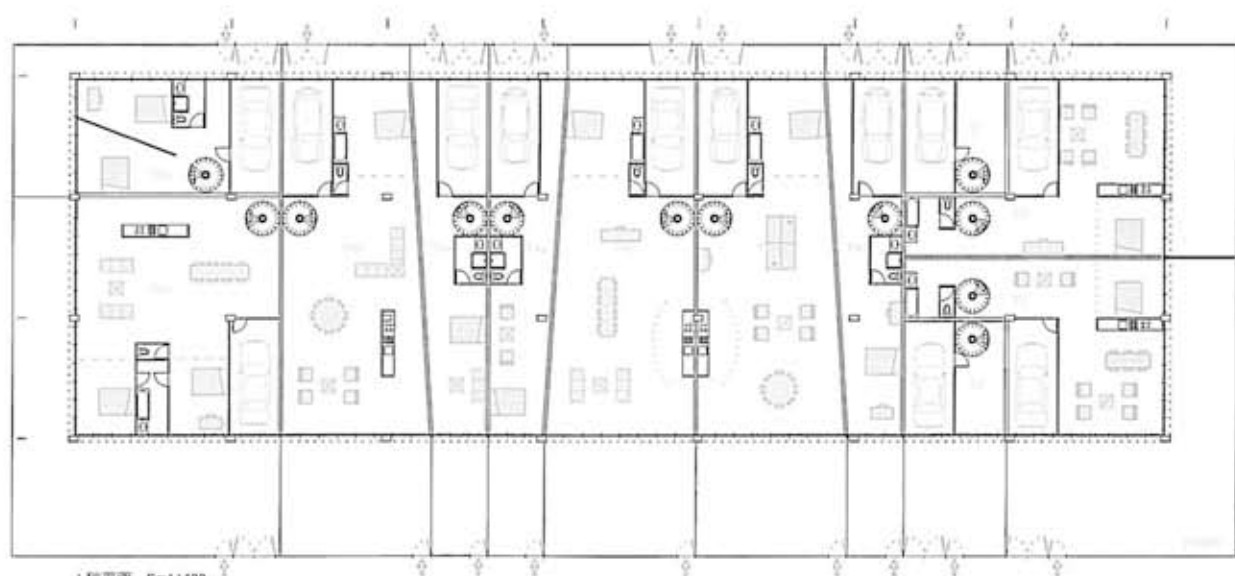
断面



断面 S=1:400



2 楼平面



1 楼平面 S=1:400

パレ・ド・トーキョー、現代的創造活動の場、パリ [2001]

Palais de Tokyo, Center for Contemporary Creation, Paris

Architects: Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with Florian De Pous, Jallil Amos, Mathieu Laporte, David Pradel, Emmanuelle Delage
Engineers: Ingérop (technical studies office), CSTB (fireproofing of structures)
Technical consultants: Gaudriat (fire prevention and security)
Client: Ministère de la Culture et de la Communication (Délégation aux Arts Plastiques), EMOC (Etablissement public de maîtrise d'ouvrage des travaux culturels)
Site: Palais de Tokyo, Paris, France
Surface area: 7,800m²
Cost: 3,080 Million euros (exclusive of tax)
Competition: December 1999
Completion: November 2001

パレ・ド・トーキョーは、もともとは1927年に万国博覧会のために建てられた近代美術館であった。そこには、国立近代美術館所蔵コレクションが、1974年に完成したボンビドゥー・センターへ国立近代美術館が移転するまでのあいだ預けられていた。その後、ここに1984年から1995年にかけてさまざまなプログラムがこの建物を占めたが、徐々に建物は分割され、すべての部屋が閉ざされて、遂には一つの巨大なブラックボックスと化してしまった。ここがとりわけ自然光に恵まれた、本来的に質の高い場所であっただけに、これはまったく逆のありようである。1990年代初頭に、パレ・デュ・シネマの建設という触れこみで大改修プロジェクトが計画された。プロジェクトは数ヶ月にわたる工事の後、1998年に放棄されてしまったが、その際に建物内部を取り壊す大がかりな工事が行われ、内部の壁や仕切りのすべて、天井、各種装飾、さらには配線、暖房配管、エレベーター、フロアの扉、といった建物の基礎設備にまで取り壊された。建物はその状態のまま残された。

文化省が1999年末に設計競技を開催したとき、建物はそうした状態だった。設計主旨は、きわめて低コストによる、「現代的創造活動のための場を提供する施設」というものだった。この計画は設計競技の主催者たちによって次のように説明された。「フランスおよび世界各国の人々の創造活動のための対話の舞台づくり、可能性と交換の場づくり、開かれた美的討論のための空間づくりに向けたプロジェクトの創出。この場所は、正午から真夜中まで開館して、一般大衆と現代芸術のあいだの距離を縮め、両者をより熱っぽい関係で結ぶであろう……」計画に従えば、プロジェクトは「大規模な工事になり、節目節目にはあらゆる方法でイベントが催されて盛り上がるであろう……」とのことだった。

前回の工事が中断された結果、敷地に行ってみると目を奪うほどの空間がまだそのままの状態で見ることができた。すっきりとしたコンクリート製の1937年の建物は、打放しの工場生産的でモダンな佇まいを残したまま、剥き出しの状態で作っていたのである。モニュメンタルなファサードの内側の、建物内部の空間は、飾り天井が取り壊されたおかげで壮大な荒野のようである。フロア高(およそ8m)と容積は驚くべきもので、自然光がいたる所にふんだんに差し込んでいたが、これは天窓の大きなガラスとファサードに配置された大きなガラス窓から上手に取り込まれているのである。

我々の解答は、設計主旨に盛られた「施設」という言葉にこだわって、単純で「軽い」ものとなった。それは、剥き出しになった空間の驚くべき質の高さ



と非常に限られた予算というところから着想を得ている。すなわち、

既存部分を変更せずにそのまま利用し、建物の物理的美的質の高さを最大限に活用する。

広大な自由な空間を仕切らずに保存する。

穴あき構造にする——すなわち雨の音を聞いたり、光や太陽が内部に差し込むのを見たり、街を眺めたり、入口をたくさん設けて、芸術センターの類の建物でしばしば連想される壁障のようなイメージを払拭するようにする。そのためには、取り壊し工事によってできた空や街路に向かっての現在の無通しの透明状態を保存する——すなわちひとつでありながら、各フロアにおいてそれぞれに見え方が異なり、変化する外界との接続を保存する。

空間を住まう場としてとらえる。

この場所は広場に似たものでなくてはならない。我々が参照例として提案したマラケシュのジェマー・エル・フナー広場は、そうした通過と出会いの場、自由に利用できる空間という理念を完璧に体現してくれるもののように思えた。それは広い土の広場で、境界線も引いてなければ、路上施設の類もなく、いっさいの制約がない、自由な空間である。夜ともなれば、広場は無人になる。車も自転車もまっすぐに全速力で走り抜ける。夜が明けると次第に、踊り子、曲芸師、語り部、商人らが集まり出し、道路の真ん中に陣取り始める。周りには見物人の輪ができて、自動車はそれを迂回するように走らねばならない。毎日、制限もなく広場はいろいろな人やモノの動きにつれて新しく生まれ変わり、変貌してゆく。

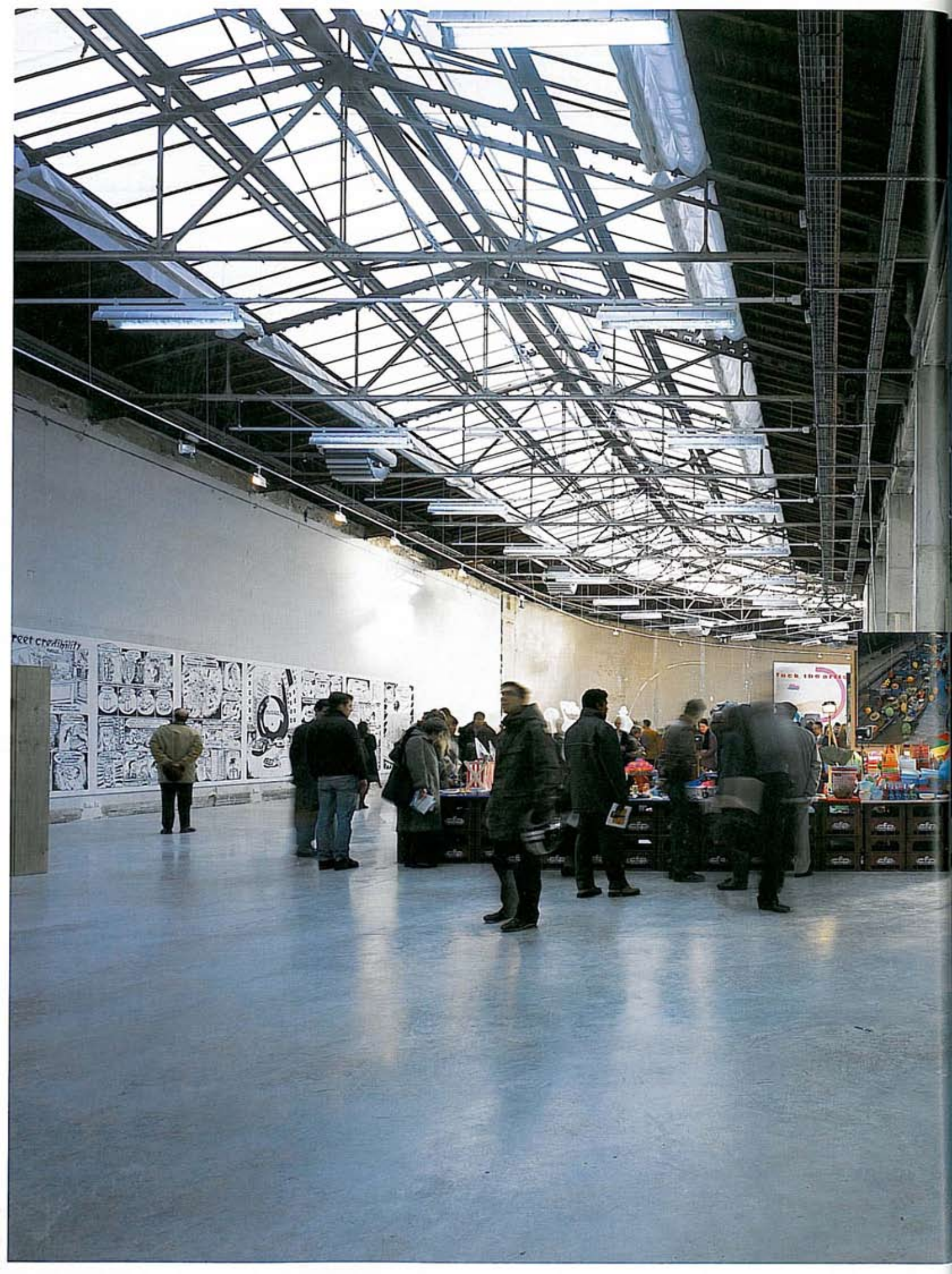
設計競技の開始の時点で提案されたこの広場という参照対象は、その後も本質的なイメージとして、

技術的なものの彼方へとプロジェクトを導く、到達すべき理想として残っていた。

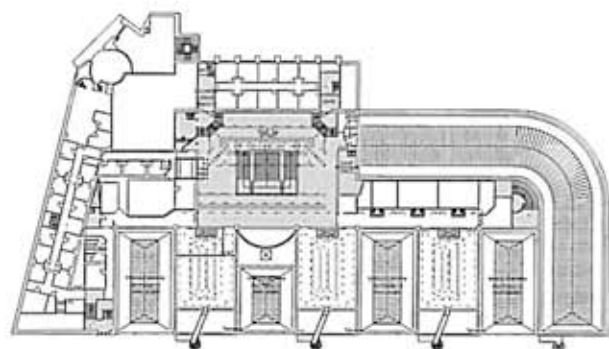
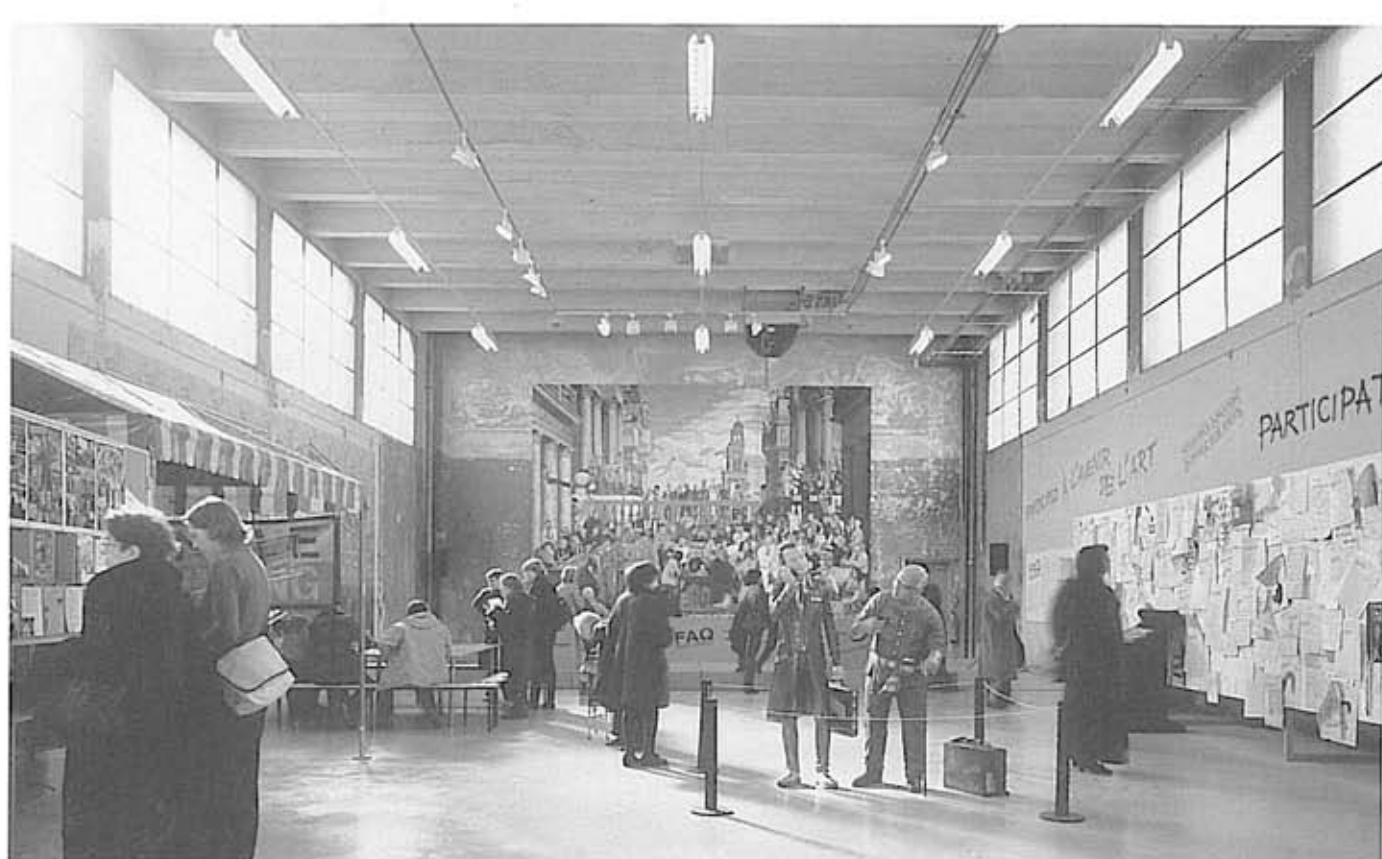
と同時に、この作品では予算の要求する厳しいヒエラルキーに従って、緊急かつ優先的な必要事項が決められる。すなわち、構造的安定性の確保、安全基準への適合、公衆が容易に利用できるようなアクセス条件の創出、照明、配線、暖房、垂直方向のサーキュレーションといった各種ネットワークの再整備、単純で効率的で快適な温度調節システムの設置などである。排気と通気は、自然な方法で行うことが何より優先される。それは園芸用の温室を導入した上で、温室のガラス面に取りつけられた開閉パネルによって行われる。室内温度が上昇すれば、自動的にパネルが開き、すぐ下を流れるセヌ河によってもたらされる冷たい空気や、あたりの地域をつねに自然なやり方で通気させる空気の流れを取り込むことができる。こうした通気システムにさらに、日照量に応じて自動的に調節を行うブラインドが加わる。

建物の外側には軽い変更が加えられる。すなわち、西側ファサードの4つの切妻面をのぼる螺旋階段と、橋をまたいで街路と建物をつなぐ通路である。最初は安全基準(消防車の進入口)の問題に厳密なあたりで対処するために、通路幅がかなり広げられたのがきっかけで、結局一般客用の広い進入路へと変わってしまった。軽めの取り外し可能なこうした建物への追加物は、やがてはこの建物のモニュメンタルな性格を茶化し減少させてゆくだろう。そしてそれがパレ・ド・トーキョーに出来上がる現代的創造活動の場のための施設ということの意味なのである。

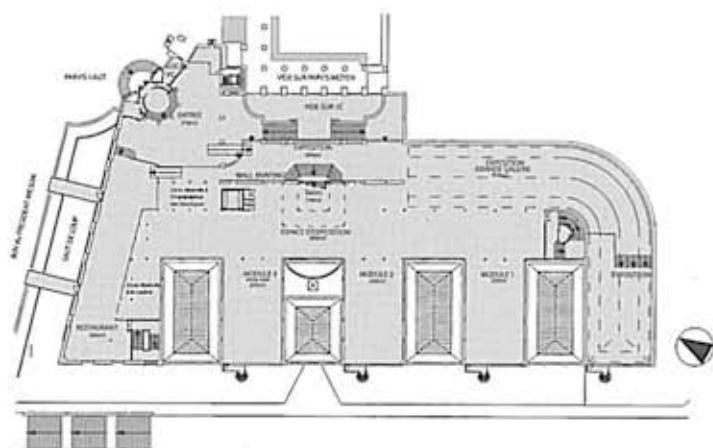
設計に際しては建物の総体的な性格を考慮して、使用されていないスペースの運用を助けるためにあとからそうしたスペースをプログラムに追加できるようにした。(訳=鈴木圭介)



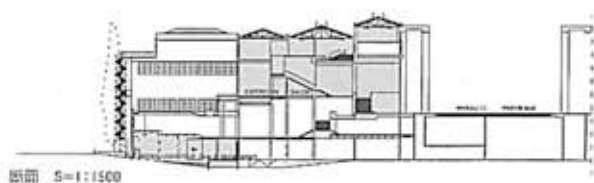




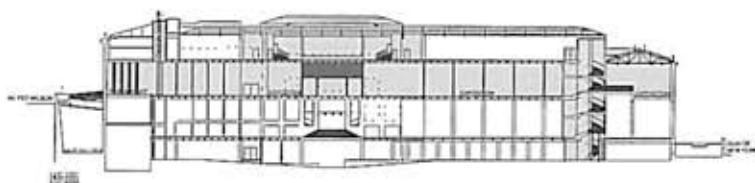
平面 (level 3 A)



平面 (level 2) 1:1500



断面 1:1500



断面

クラフト、セラミック・ネットワーク2002、リモージュ

Craft, Ceramic Network 2002, Limoges

Architects : Anne Lacaton & Jean Philippe Vassal with David Pradel
Client : CRAFT, Centre de Recherche sur les Arts du Feu et de la Terre
Project started : 2002

このプロジェクトは、特定の素材とその素材を特産品とする都市リモージュの発見から始まった。

一方では伝統的なやり方でセラミックを扱う世界がある。これは、世界のどこにでもあり、誰もがよく知る食器工芸、装飾芸術の世界である。すなわち、陶製壁面タイル（モザイク）や、単純の極致から洗練の極致に至るまで、あるいは手頃な値段から高額品に至るまでのさまざまな日用品（工芸品、食器、壺・花瓶類）などが含まれる。

他方では、高度な科学技術が駆使される魅力的な世界がある。すなわち、きわめて特殊な用途、ことに医療、宇宙工学などに使用される工業用精密高機能セラミックスや各種絶縁材……等々。

さまざまなメーカーを訪ねるうちに、セラミックスの世界に興味と興奮を感じるようになり、大いなる可能性が垣間見えるように思われたが、まだまだ誤解もあり、素材間の細かいニュアンスをすべて見分けたり、組成上の差異を識別したり、名称（陶器、磁器、珪酸、珪酸およびファイアンス、ガラス、精密部品用の工業用セラミックス、建築カーバイドおよびアルミナ……等々）を直ちに覚え込むことは困難だった……。

研究

セラミックスの物性は多様であり、現代建築の要求に合致する。脆くて固く、被覆材としては腐食、腐食、熱に対する化学的安定度が高く、断熱特性（耐熱性）を有し、セラミックス特有の生化学的特性により金属との併用で金属の力学的性能を向上させることができる。

とはいえ、製造上の制約が存在する。鋳型、焼成、窯の大きさといった要素により、製品の大きさが制限されるのである。

大きな応用性を有するこうした特性や性能について、我々は頭の中で完全に理解できていたわけではなかったものの、すぐさまいろいろなアイデアを考え、現在手がけているものやその他のプロジェクトでの問題点に関して解決が得られるのではないかと期待を膨らませたが、すぐにためらいが出て、より技術的側面での利用をはかるべきか、それとも純粋に装飾的側面での利用をはかるべきかで迷った。伝統的な建築分野で知られている装飾セラミックスにはつねに一定の意味が担われていた。それには、与えられた状況に完全に適合すべしというコンテキストがあったのである。こうして装飾用途のみでの実用化は我々のプロジェクトでは難しいように思われた。食器工芸で使われる磁器に、我々はとりわけ魅了された。その固さ、堅牢性、不変性、驚くほどの白さ、洗練度などの点で魅力的である。薄

さ（厚さ2.5~3.5mmの皿用）、繊細さ、輝き、脆さ、固さ、耐熱性といった性質は、我々が開発を望んでいた美的工業的特性である。

現在計画しているさまざまな応用プロジェクトとして次のものがある。製造、大きさ、強度、使用上のさまざまな制約からすぐに放棄されてしまった構造要素の実現、あるいはその他の住宅部品、防水材料、絶縁材としての再利用、セラミック繊維等々。

最終的には、このセラミックスのプロジェクトは、手がけているいくつかの建築プロジェクトでの我々の関心事（特にパレ・ド・トーキョーのプロジェクトで旧建物の熱に対する安定度を確かめるためにCSTBと共同で行った耐熱調査）と重なり合うことになった。こうして以下のような技術的なないし美学的側面でのとりわけ共鳴し合う部分が見出された。すなわち、

- ・熱に対する反応
- ・反射率の熱特性
- ・光の透過特性の高さと拡散的反射
- ・美的、装飾的特性の高さ——輝き、模様、繊細さ

いくつかの参考事例が思い浮かぶ。すなわち、光の少ない場所での光の反射については、パリ環状道路のトンネル、バルセロナのガウディ設計によるグエル公園、ウィーンのカフェのセラミックの丸天井、イスファハンの回教寺院のアスレホを使ったファサード……等々。

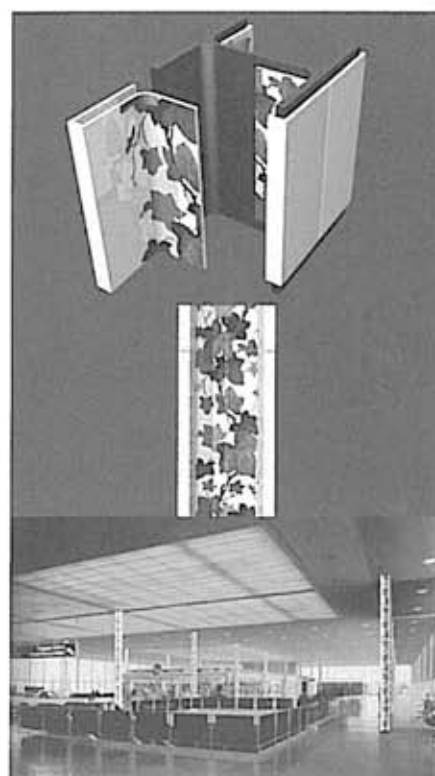
プロジェクト

このセラミックスのプロジェクトは、熱から鉄の構造要素を守るために、鉄材を被覆する磁器部品を製作するものである。内側の面は、皿やその他の磁器から借用されたツツジの模様やその他の模様で装飾されるだろう。

構造要素の候補は、近代建築の本質的要素である垂直の鉄柱である。これは、あらゆる鉄骨フレームを使った建築に使用される基本製品である。断面形状がH、I、Uといった形を持つ、古典的素材として使われる圧延鋼造製品である。この断面形状は、力学的性能の正確な表現であり、用途を満足させる必要最低限の性能しか持たない建材であることを表す。プロトタイプとして選ばれた断面形状は、広く使用されているHEA 160タイプのものである。

非被覆鉄骨柱の熱安定度は低く（15~30分程度）、ほぼすべての場合で安全基準の要求値を下回る。これは制約となり、たいいては保護処理が行われる。その際に最もよく使用される方法は、

- ・4時間の熱安定度を達成させるための最低2mm厚の石膏プレートもしくはショットブラス



ター

- ・30分~1時間半の熱安定度を持つ、0.5~4mm厚の磁器塗装。表面はざらつき、耐用年数に限りがあるため、5年ごとに塗装をやり直さねばならない。

こうしたやり方は多くの場合、断面形状を覆い隠し、構造部分の軽やかさやすっきりとした佇まいや、鉄によって可能になる外観的インパクトの少なさといった効果を減じてしまい、断面形状を変えて重たいものにする（正方形断面を持つ被覆）結果、素材本来の姿を失わせ、それを使う気にさせなくなってしまう。

開発

プロジェクトは、以下のような連続的段階を踏んで、具体的なセラミックス応用製品を開発する必要がある。

- ・熱に対する反応の正確な知識を得る。研究室での試験を行う必要がある。
- ・固定方法の開発——耐火能力を持ち、鉄材への究極的固定を保証する接着剤やモルタル材
- ・熱収縮係数の管理（およそ13%以下）
- ・金属断面形状を最もよく保存しかつ薄く（2.5~3mm厚）被覆するための磁器素材の製造法についての研究（訳＝鈴木圭介）